

## 小城鍋島文庫蔵『十帖源氏』翻刻稿(一)——桐壺卷ノ葵卷

中尾友香梨<sup>1</sup> 白石 良夫<sup>2</sup> 日高 愛子<sup>3</sup> 三ツ松 誠<sup>4</sup> 沼尻 利通<sup>5</sup>  
大久保順子<sup>6</sup> 土屋 育子<sup>7</sup> 明石 麻里<sup>8</sup> 村上 義明<sup>9</sup>

A Transcription of the *Ten-Volume Genji* in the Ogi Nabeshima Collection (1) — From “Kirisubo” to “Aoi”

Yukari NAKAO, Yoshio SHIRAIISHI, Aiko HIDAKA, Makoto MITSUMATSU  
Toshimichi NUMAJIRI, Junko OHKUBO, Ikuko TSUCHIYA, Mari AKAISHI  
Yoshiaki MURAKAMI

### 要 旨

『十帖源氏』とは源氏物語五四帖を一〇冊にまとめた梗概書である。江戸前期に活躍した俳諧師野々口立圃(一五九五～一六六九)の手になるものであり、立圃自身による一三一回に及ぶ挿絵が添えられ、親しみやすい体裁となっている。本書は承応三年(一六五四)に成立した後、版本に刷られて流布し、その後さらに復刻・再版され、江戸時代を通して広く読まれたと見られる。ただ、梗概書といっても、決して立圃が自らの言葉で内容をわかりやすく要約したものではなく、源氏物語の原文をほとんど改変することなくほぼそのまま抄写しており、しかも和歌はすべて載せている。単に複雑で難解な記述の部分を大幅にカットすることによって縮小化を図ったのである。したがって『十帖源氏』は同じく立圃の手になる、子供向けに比較的平易な文体に書き改められた『おさな源氏』とは趣を異にするものであり、あくまでも源氏物語の原文の古雅な趣をそのまま残しながら、より手軽に源氏物語の世界を楽しめるように工夫された書物であるということができよう。

ここに翻刻するのは佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵『十帖源氏』である。小城鍋島文庫には二部の『十帖源氏』(函架番号〇九一九、函架番号〇九一二〇)が蔵されているが、前者の末尾には立圃の自筆による跋文が附されており、しかも巻毎に朱と墨の書き入れが夥しく施されている。一方、後者は前者の再版本と見られ、書き入れも基本的に前者のものをそのまま書き写している。そこで、翻刻にあたっては前者を底本とし、そのオリジナルな資料的価値に注目して、書き入れや記号・濁点の有無などを含め資料に記されている情報を可能なかぎり忠実に反映させる方針で翻刻を行った。

た。本稿は「小城鍋島文庫研究会」（旧称「十帖源氏研究会」）のメンバーによって作成されており、平成二七年度科学研究費・基盤研究（C）「地域の文化財群としての小城鍋島藩蔵書の研究―その全貌の解明と具体例の分析」（研究代表者＝中尾、課題番号15K02251）の研究成果の一部である。今回はまず第一冊と第二冊を掲載し、残りについても順を追って掲載していく予定である。

註 清水婦久子『「十帖源氏」『おさな源氏』と無刊記本『源氏物語』―若紫巻の本文―』（『青須我波良』五八号、二〇〇三年三月）を参照。

（文責 中尾）

## 解題

### 従来の『十帖源氏』版本研究

『十帖源氏』は大本一〇巻一〇冊。著者野々口立圃の跋文によって、承応三年（一六五四）成立と推定される。<sup>註1</sup>その跋文（第一〇冊最終丁ウラ）であるが、伝存する版本によって、つぎの四種あることが報告されている。<sup>註2</sup>

- ⑦ 跋文そのものがない本（該当箇所白紙）
- ① 跋文末に著者名（「立圃」）のみ彫られた本
- ② 跋文末に年記（「万治四年卯月吉辰」）と書肆名（「荒木利兵衛板行」）の彫られた本
- ③ 跋文末に年記（「万治四年卯月吉辰」）と著者名（「立圃」）の彫られた本

図版1に見るように、年記・著者名・書肆名以外は、一見したところ同一の版本で刷られたかに見える。跋文の丁だけではない。右の四種の版本はいずれも全一〇冊、これらもざっと見たところ、全冊にわたって同一の版本で刷られたかに見える。ということで吉田幸一は、これらの版本が同一の版本によって刷り出されたものという前提でもって考証をおこなった。すなわち跋文の最後の部分のみを埋木による修訂と見なし、あとは刷の前後関係を観察し、その刷の順序を、

⑦ ↓ ① ↓ ② ↓ ③

と推定した。繰り返しになってしつこいが、⑦①②③四種の版本が、跋文の一部のみを操作しながら、あとは同一の版本によって刷り出され

た、と考えての推定であった。爾来、『十帖源氏』の版本に関してはこのことを前提にして語られてきた。

### 異版の存在

もってまわった言い方をしたのは、伝存版本の詳細な観察の結果は、一見したところとは異なるからである。

すなわち、右の⑦①②③四種の版本は、同一の版本で刷られたものではない。⑦①と②③に使った版本はそれぞれ異なっていた。⑦①が初版で、刷の状態から判断して、⑦のほうが早い刷、①が後刷ということになる。②③は再版であり、そのうち②が早い刷、③が後の刷である。この事実、われわれの研究会（小城鍋島文庫研究会）によって明らかにされたところであるが、吉田の研究との相違は、右記の図式に倣えば、

⑦ ↓ ①  
② ↓ ③

となる。②は新たに彫り起こした版本で刷った版本である。

吉田を始めとする従来の版本研究が異版の存在に気づかなかつたのは、これが厳密な意味での覆刻（いわゆる「被せ彫り」<sup>かぶ</sup>）だったからである。丁寧に覆刻されたものなら、二本を同一机上に並べて比較観察できる環境でないと、覆刻された事実が容易に気がつかない。当研究会でそれができたのは、たまたま小城鍋島文庫に『十帖源氏』版本が二部、先の⑦③にあたる本が伝存していたからである（図版2）。

したがって、これまでの吉田の研究とその上に立って行われていた

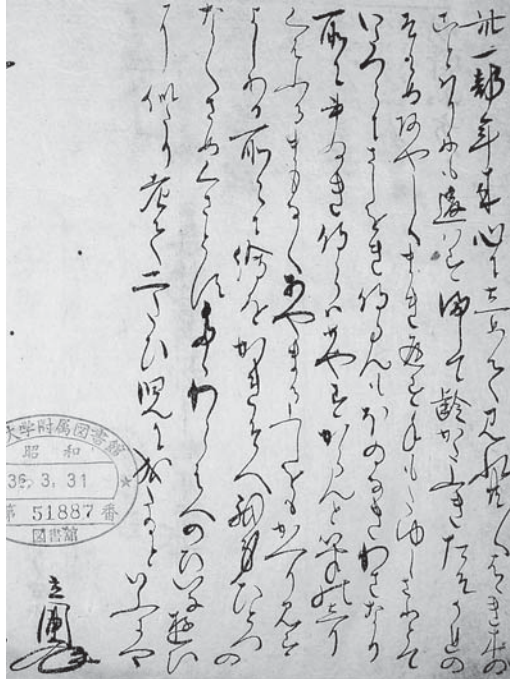




小城鍋島文庫『十帖源氏』の意義——甲本の書入れ

小城鍋島文庫所蔵の『十帖源氏』は、しかし、当文庫が学界に知られた当初から、また別の点で注目されていた。一方の本（函架番号〇九一九）は初版本の⑦に該当するのであるが、問題の丁に④以下と同じ跋文の文章が著者立圃の直筆によってしたためられていること、かつ小城藩第二代藩主鍋島直能の蔵書印が捺されていることである。そこから、著者献呈の本であろうと推測されている。この注目すべき一本を、われわれは「甲本」と呼ぶ。もう一方（函架番号〇九一一〇）は再版本⑤に該当する版本で、それを「乙本」と呼ぶ。

【図版3】 小城鍋島文庫本自筆跋文

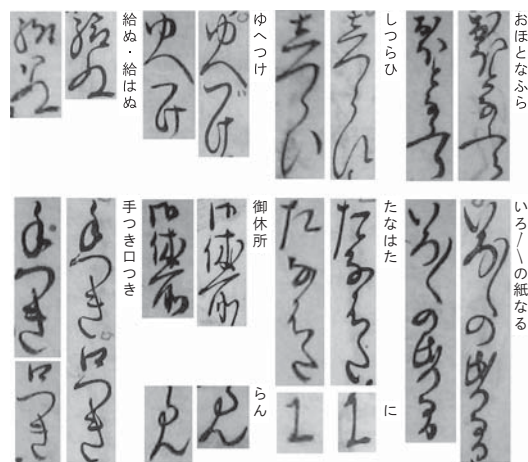


甲本に書き記された立圃直筆の文章は、版刻された他のそれとまったく同文である。この文意を付度して、立圃から直能へ宛てたプライベートな献呈の辞と読み取れば、④以下においてそれを版刻流用して跋文と

して仕立てた、と考えられる。

ところで、甲本における立圃直筆は、右献辞のみにとどまらない。これまで指摘されてこなかったが、毎丁に施された夥しい墨筆の書入れが、じつは立圃の筆跡に等しい。版本『十帖源氏』の版下は立圃の筆になるものであり、図版写真に見るように、書入れと照合して筆跡はそれに一致する。たとえば、「ら」「に」「ぬ」「た」「は」「け」「ひ」「ふ」などに同じ癖が見いだせる。<sup>註5</sup>

【図版4】 甲本第一冊にみる本文（右）と書入れ（左）の筆跡



墨筆書入れはその内容から見て、当時おこなわれていた源氏注釈書を適宜写したものである。いまだこれと特定するに至っていないが、『河海抄』『紹巴抄』などに一致する記事が多い。<sup>註6</sup>この書入れが立圃自筆とするなら、著者本人の講義・講釈用のノートとして物されたと思われる。著者の手元にあったその手沢本を、献辞を添えて直能に親しく

呈上したのであろう。あるいは、直能のほうから所望したのかもしれない。

直能と立圃の交渉をうかがわせる同様の資料として、当文庫にはもう一点、立圃の紀行文『みちのき』の、これも直能蔵書印の捺された著者自筆本がある。直能は後室が公家の坊城家<sup>ぼうじょう</sup>の出であり、自身も飛鳥井<sup>あすかい</sup>雅章<sup>まさあき</sup>の門人であって、宮廷歌壇との交遊も厚かった。一方の立圃も堂上<sup>どうじやう</sup>サロンに出入りし、とくに大名と公家との文芸を通したパイプ役をはたしていた。両人の交渉の背景にはそういった環境があった。

甲本にはほかに墨筆のそれとは筆跡の異なる朱筆書入れがある。内容的には次のように分けられる。

- ① 墨筆書入れとの照合のための合印
- ② 濁点
- ③ 墨筆書入れの訓点
- ④ 振り仮名
- ⑤ 主語・目的語・会話主などの補足
- ⑥ 相当する登場人物名
- ⑦ 簡単な語釈

などである。これらは該書が立圃から直能に譲られて以降に施されたものと思われる。直能の手になるかどうか、にわかには断じがたい。

なお、乙本も甲本の書入れを墨・朱ともほぼ忠実に写している。

## 註

- 1 日本古典文学大辞典「十帖源氏」の項（渡辺守邦稿）。
- 2 古典文庫『十帖源氏』（一九八九年）解説（吉田幸一稿）。
- 3 沼尻利通「佐賀大学小城鍋島文庫『十帖源氏』の挿絵と覆刻」（白石良夫編『小城藩と和歌―直能公自筆「岡花二十首和歌」の里帰り』二〇一三年一〇月、同「野々口立圃『十帖源氏』の初版と覆刻」（『雅俗』一三号、二〇一四年七月）。

- 4 島津忠夫「小城鍋島文庫善本書目解題」（『佐賀大学文学論集』三号、一九六一年九月、『島津忠夫著作集』第一〇巻所収）。

- 5 白石良夫「小城鍋島文庫『十帖源氏』のこと」（『佐賀学Ⅱ―佐賀の歴史・文化・環境』二〇一四年四月）において、この墨筆書入れを直能によるものとしたが、それをここに撤回する。

- 6 研究会では「紹巴抄」との関係に注目している。貞門派俳諧師（立圃）と連歌師（紹巴）となら、きわめて近い。序文に「寛弘より慶安まで六百五十年余」という書入れがなされているが（本稿該当箇所参照）、『十帖源氏』が承応三年の成立、万治四年以前の初版発行なら、この「慶安」は立圃書入れのリアルタイムを意味するとは考えがたい。だとすれば、書入れのもとになった底本類に深く関係する年号であろう。大阪府立図書館には、能的なる人物による慶安三年九月一日の識語をもつ「紹巴抄」写本が伝存している由（伊井春樹「源氏物語語注釈書・享受史事典」）。能的はおそらく北野天満宮の連歌師であろう。直能はおなじ北野の能貨<sup>のうか</sup>から古今伝授を受けており、この能貨は当時の源氏流布版本『首書源氏物語』の著者という説がある（『直能公御年譜』寛文元年二月二日条「能円は源氏物語鍛錬の人、其子能貨別器量<sup>二</sup>有之、親能円之伝を継、源氏の首書を出したり」、日下幸男「近世古今伝授史の研究」、清水婦久子「源氏物語版本の研究」）。勿論、いずれの情報も書入れの典拠とすぐさま結びつくものではない。が、この時代の源氏物語受容をめぐる、さほど広くない人間関係が垣間見えるような気がする。今後の課題としたい。

- 7 井上敏幸「元禄文化と『葉隠』―武士道と歌道―」（『葉隠研究』四九号、二〇〇三年三月）、同「直能の和歌」（前掲『小城藩と和歌』）、日高愛子「飛鳥井雅章と鍋島直能―「道」の相伝と和歌―」（『佐賀大國文』四三号、二〇一五年三月）。
- 8 小高敏郎「貞門時代における俳諧の階層的浸透」（『国語と国文学』三四巻四号、一九五七年四月）、菅原郁子「鳳林承章サロンにおける江戸初期の文人たち」（二〇一四年度日本近世文学会秋季大会口頭発表）。

（文責 白石）

## 翻刻分担

序・桐壺（白石良夫）帚木（沼尻利通）空蟬（大久保順子）  
夕顔（明石麻里）若紫（三ツ松誠）末摘花（日高愛子）  
紅葉賀（土屋育子）花宴（中尾友香梨）葵（村上義明）

※若紫・末摘花巻に関しては、研究会において、それぞれ末安礼奈・江頭三保子が輪読を担当したが、最終的には右の翻字分担者が翻刻データを作成した。また原稿の作成に際しては各巻の翻字分担者に加え、亀井森（鹿児島大学教育学部准教授）・二宮愛理（九州大学大学院博士後期課程）・河野未弥（同大学院修士課程）・脇山真衣（同上）が点検を行った。

## 凡例

- 一 本稿は、佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵『十帖源氏』甲本（函架番号〇九一―九）の翻刻である。今回は第一冊・第二冊を収録した。
- 一 版本・墨筆書入れ・朱筆書入れ、いずれも漢字・仮名の区別は底本を再現し、現行の字体を用いた。仮名遣い・濁点についても底本の通りに従った。
- 一 虫損等によって読み難い箇所は、版本については甲本と同じ初版本である古典文庫影印本によって、書入れについては小城鍋島文庫乙本によってそれらを補った。
- 一 版本については、以下のような処理をした。なお、挿絵はこれを省略した。
  - (1) 行移りは底本の通りに従い、丁移りの箇所に丁数（オモテ・ウラ）を示した。
  - (2) 割書き・小字はポイントを落として「」内に一行書きした。
- 一 墨筆書入れ（頭注・脚注）については、以下のような処理をした。

- (1) 各頁の末尾にまとめた。
- (2) 版本本文の被注箇所に傍線を付し、それと対照できるように番号をつけた。

一 朱筆書入れについては、以下のような処理をした。

- (1) 書入れ箇所に「」で括って示した。

- (2) 濁点の補足は、傍らに「」を付した。

一 その他、固有の処理をしたものについては翻刻者による註記を付した。

## 【第二冊】

きりつほ

は、き木

うつせみ「（一才）

<sup>1</sup> 光源氏物語は村上天皇女十宮太扇院

より一条院の後上東門院へめつらかなる草子  
や侍ると御所望の時式部をめて何にても  
あたらしく作りてまいらせよかしとおほせらる  
式部石山寺にこもりて此事を祈り申す折  
しも八月十五夜の月湖水にうつりて物語  
の風情空にうかひければ先須磨の巻より  
書たると也巻の数は天台六十巻題号は四諦

1 題号全篇以「光源氏事」為詮故号「源氏」

の法門有門空門亦有亦空門非有非空門也

一には詞をとり二には歌をとり三には詞と歌とを取」(1ウ)

四には歌にも詞にもなき事也<sup>2</sup> 始は藤式部といひ

しを此物語一部の内むらさきの上の事を勝れ

ておもしろく書たるゆへ紫式部といひかへらるゝ也

観音ノ化身ト云々檀那院僧正天台一心三観

血脈許可也

堤中納言兼輔——<sup>因幡守</sup>惟正——<sup>嵯峨守</sup>為時——<sup>紫式部</sup>女

<sup>摂津守</sup>〔母ハ〕為信女〔堅子〕」(2オ)

(挿絵) 一(2ウ)

桐壺<sup>〔翻刻者注Ⅱ巻名表示なし。いま補う〕</sup>

いつれの御時にか<sup>4</sup>女御<sup>5</sup>かうゐあまたさふらひ給ける  
中にいと<sup>6</sup>やんことなきゝ<sup>7</sup>はにはあらぬかすくれてとき  
めき給ふありけり〔いつれの御時とは<sup>7</sup>醍醐天皇をさしていへり時めき給ふとは  
きりつほの更衣の事也〕

梨壺〔照陽舎〕 桐壺〔淑景舎〕 藤壺〔飛香舎〕

- 2 時代一条院 寛弘ノ初に作り 堀河院 康和ニ流布ス 寛弘より康和まで九十六年  
寛弘より慶安まで六百五十年余
- 3 式部ハ左衛門佐宣孝ニ嫁テ<sup>〔作者也〕</sup>大式三位ヲ生リ
- 4 女御ハ至<sup>〔二〕</sup>二位三位<sup>〔三〕</sup>雄略天皇ニ始 漢朝ニハ 妃百廿人 后一人 夫人三人 嬪九  
人 世婦廿七人 女御八十一人 此帝ニハ 弘徽殿女御 承香殿女御 麗景殿女御 同 弘  
徽殿太后 藤壺中宮
- 5 更衣ハ中少将又ハ守領ノ女也 女官也 非奉公自然ノ時 参内セリ 御衣ヲ召カヘラ  
ル、便殿ニ居也 故号更衣
- 6 無停事 上臈は思し召す事やみ給はぬ故也
- 7 醍醐 朱雀 村上 冷泉 むらかみをのけて冷泉とつゝくるは天台四諦法文の心也

梅壺〔凝花舎〕 雷鳴壺〔襲芳舎〕

此きりつほにすみ給ふかうゐを御てうあひあれは

きりつほのみかとゝも申也あまたの女御かうゐそね

みてあさゆふの御みやつかへにつけても心をのみうこ

かし<sup>9</sup>〔へ〕うらみををふつもりにやあつしく成ゆき〔をもき病也〕

物心ほそけに里かちなるをみかといよ〔あはれに〕」(3オ)

おほして人のそしりをもえはゝからせ給はすもろ

こしにもかゝる事のおこりにこそ世もみたれあしかり

けれとあちきなう人のもてなやみくさになりて

楊貴妃のためしもひき出つへう成ぬ此かうゐの父

はなくなり母北方いにしへのよしあるにて御かたゝ

にもをとり給はねと事とある時は<sup>12</sup>より所なく心ほ

そけ<sup>13</sup>也さきの世にも御契りやふかゝりけんきよら

なる〔へ〕玉のをのこみこさへ生れ給ぬ〔是を光君といふ也〕一の

みこは<sup>14</sup>右大臣の女御の御はらにてうたかひなきまう

けの君とかしつき聞ゆれと此君の御にほひには

ならひ給ふ<sup>15</sup>へもあらず此みこ生れ給て後はみかと」(3ウ)

御心ことにきてたれば<sup>15</sup>坊にもゐ給ふへきなめりと

- 8 桐壺は壺ノ内に桐ヲ植るゆへの名也
- 9 〔へ〕あしかれとおもはぬ山の峰にたにおふなるものを人のなけきは
- 10 殷紂姫己周幽王褒姒
- 11 玄宗楊貴妃
- 12 無頼所
- 13 〔へ〕あか玉のひかりはありと人はいへと君かよそひしたうとかりけり 斎宮豊  
玉姫歌
- 14 二条右大臣ノ女弘徽殿ノ女御悪后とて心よからぬ人也
- 15 春宮坊ト申也



一のみの女御はおほしうたかへりあまたの御かた／＼を  
過させ給ひひまなき御前わたりに人の心をつく  
し給ふもことほり也あまりうちしきりまうのほり  
給ふおり／＼はうちほしわた殿こ、かしこの道にあや  
しきわさをして御をくりむかへの人のきぬのすそ  
たへかたうま／＼なき事ともあり又ある時はえさら  
ぬめたうの戸をさしこめこなたかなた心をあはせ  
はしたなめわつらはせ給ふ時もおほかりみかといと、  
あはれと御らんして後涼殿にもとよりさふらひ給ふ  
かうぬをほかにうつし此かうぬのうへつほねに給はる  
「（4オ）  
そのうらみましてやらんかなしきみつに成給ふ  
とし御はかまきの事一の宮のにもをとらす御かたち  
心はへありかたくめつらしきまで見え給へは此君をは  
人々もえそねみあへす其年の夏御母御休所  
「更衣の事也」わつらひて里へまかてんとし給へとつねのあつ  
しさに御めなれていとまさらにゆるさせ給はす日々  
にをもり給ていとよはうなれは更衣の母なく／＼  
そうしてみこをほとめさせみやす所はかりまかて  
給ふうつくしき人のおもやせあるかなきかにきえ入

16 昇殿 昇進 参上  
17 内階  
18 渡殿 板を打渡タル也  
19 邪路なる事共也 不浄ヲちらす也  
20 馬道 えんのつ、き廊下也  
21 はしたなめはよはきにつよくあたる心也  
22 御休所トハ更衣ノ事也 御子生れ給ては御休所と申也  
23 まかでん 退出

ものし給ふを御覧してきしかたゆくすゑよろつ  
の事を契りの給へと御いらへもきこえすまゆもたゆけ  
にて「（4ウ）  
われかのけしき也かきりあらんみちにもを  
くれさきた、しとちきらせ給けるを打すて、はえ  
ゆきやらしとの給はするを女もいみしと見奉りて  
かきりとてわかる、みちのかなしきに  
いかまほしきはいのちなりけり  
てくるまのせんしなどの給はせてまかて給ふみかと御  
むねふたかり御使の行かふ程もなきに夜なかくする  
程にたえはて給ふきこしめす御心まとひ何事  
もおほしわかれすみこをはかくても御らんせまほし  
けれとれいなき事なれはまかてさせ給ふみこは  
何事ともおほさす人々のなきまとひうへも御涙の「（5オ）  
ひまなくなかれおはしますをあやしと見奉給ふ  
かきりあれはをたきといふ所にてけふりになし奉る  
母君もおなし煙にとなきこかれ御をくりの女はう  
の車にしたひのりて出給ふ内より御使ありて三位

24 「へ」夢にたになにかも見えずみゆれとも我かもまよふ恋のしけきに  
25 延喜雜式ニ云凡乗輦車出入内裏者妃限曹司夫人内親王限温明  
殿後涼殿ノ後命婦三位限兵衛陣但嬪女御及孫王大臣ノ嫡女限兵衛陣  
也仁明天皇ノ女御依病退出ノ時被聴輦卒逝ノ後被贈三位高僧女ナ  
ト禁中ノ間行歩不叶ニユルサル、也輿に輪ヲかけて手にテ引ト和秘抄に見えた  
り  
26 をたきは鳥部野ヲ云也  
27 從三位贈位也



のくらゐをくり給ふみかとは一の宮を見給ふにもわか  
宮の御恋しさのみおほし出つゝ女はうめのなどを  
つかはしありさまきこしめす野分たちはた寒き夕  
くれ<sup>28</sup> ゆけいの命婦をつかはさる勅書の歌

みやき野の露ふきむすふ風のをとに

小萩かもとをおもひこそやれ

命婦かうゐの母にあひて 「(5ウ)

すゝむしのこゑのかきりをつくしても

ななき夜あかすふるなみたかな

「うは君」いと、しく虫のねしけきあさちふに

「へ」露をきそふる 雲のうへ人

をくり物あるへきおりにもあらねはとてかうゐの

残しをき給へる御さうそく<sup>32</sup> 御くしあけの てうとそへ

給ふみかとはふけても おほとのこもらすせんさいの花<sup>34</sup>

御覧するやうにて女はう四五人さふらはせて御物語

せさせ給へり御返し奉るうは君の歌

あらし風ふせきしかけのかれしより

こはきかうへそしつこゝろなき 「(6オ)

うは君の物語わか君の御事なとそうしてをくり

28 命婦ハ女ノ惣名也韃負武官ニテ弓箭ヲ帶スル衛門ノムスメヲ云也

29 虫に身を比してよめり

30 母のみにこもりし更衣の歌「へ」五月雨にぬれにし袖をいと、しく露をきそふ  
る秋のわひしさ

31 男女共に昇殿の人ヲ雲の上人と云也

32 みくしあけかみをゆふ也

33 調度道具也

34 御寝ならぬ也

もの御らんせさは

「御」 たつねゆくまほろしもかなつてにても<sup>35</sup>

玉のありかをそことしるへく

一の宮の御母弘徽殿は久しくうへの御つほねにも参り

給はす月のおもしろきに<sup>管絃也</sup>あそびをそし給ふ人く

かたはらいたしとき、けりみかとうは君のもとをおほして

雲のうへもなみたにくる、秋の月

いかてすむらんあさちふのやと

月日へてわか君参り給ぬきよらに およすけ給へは<sup>36</sup>

いと<sup>37</sup> ゆゝしうおほしたりあくる年の春一の宮春宮に 「(6ウ)

さたまり給ふにも此君をひきこさまほしうおほせと<sup>38</sup>

世の うけひくましき事をは、かり給て色にもいて<sup>39</sup>

させ給はす彼うは君なくさむかたなきゆへにやうせ

給ぬれは又これをかなしひおほす若君七つに<sup>40</sup>

成給へは 文はしめさせ給て御かくもんはさる物にて

琴笛のねにも雲井をひ、かし給へり其頃 こまう<sup>41</sup>

とのさうにん参りて此君のさえかしこくかたちの

きよらなるにめて奉りてひかる君とつけ奉りを

くり物ともさ、けけり此君を た、人にはあたら

35 臨<sup>エン</sup> 邛道士幻術をもて貴妃にあひてかんざしはさみなどを玄宗にさつく是は更

衣にあはて母の方よりなれば不足也方士よりをとりたると也

36 及助<sup>をよすけ</sup>

37 優々 又忌 ゆたか也

38 承引

39 孝経或は貞観政要ヲよみ給ふ也

40 高麗人

41 直人<sup>臣下にはあたら物也</sup>

しけれと源氏<sup>42</sup>になしたてまつるへくおほしをきてたり」(7オ)

(挿絵) 「(7ウ)

年月にそへて御休所の御事わすれさせ給はす

御心なくさむかたなし先帝<sup>43</sup>の四の君御かたちく

れ給へる事をないしのすけそうして参らせ給へり

〔是を藤つほと申也〕昔の御休所によく似給て人のきは

もまさり給へはをのつから御心うつりにけり源氏

の君はみかとの御あたりさり給はねは藤つほにも

しけくわたり給ふ光君に立ならひ御おほえもと

くなれはかやく日の宮ときこゆ源氏の君十二

にてけんふくし給ひひきいれの大<sup>45</sup>臣<sup>46</sup>のみこはら

の姫君をそひふしにとさため給ふ〔是あふひの上也〕」(8オ)

(挿絵) 「(8ウ)

〔御〕いときなきはつもとゆひになかきよを

ちきるこゝろはむすひこめつや

左大臣御返し

むすひつる心もふかきもとゆひに

こきむらさきのいろしあせすは<sup>47</sup>

左のつかさの御馬蔵人所の鷹すへて給り給ふ<sup>48</sup>

42 嵯峨天皇弘仁五年男女卅人二源ノ姓ヲ玉フ是源氏ノ始也

43 光孝宇多

44 元服令ニ云無位ハ黄袍也元服ノ後ハ縫腋ノ黄袍ヲ奉ルヘシ

45 おと、は左大臣殿也ひきいれはもとゝりを引入るゆへ也加冠とてゑほしおやと

云も同じ事也

46 おと、の北ノ方は桐壺の帝の御妹也此御むすめなれはみこはらと也

47 左馬寮也

みはしのもとに上達部みこたちつらねてろく  
ともしなくに給り給ふその夜おと、の御里に

源氏の君まかてさせ給ふ〔源は十二才あふひは十六也〕おと、の子蔵人

少将には右大臣殿の四の君をあはせ給へり源氏

の君はうへのつねにめしまつはさせ給へは心やすく」(9オ)

里すみもし給はす藤つほの御ありさまをたく

ひなしとおほしさやうならん人をこそ見めにる

ものなくもおほしけるかなとおほせはおほいとの、

君<sup>49</sup>には心もつかすおとなになり給てのちは有

しやうにみすの内にもいれ給はす御あそひの

おりくことふえのねにき、かよひほのかなる御

こゑをなくさめにて内すみのみこのましよう

おほえ給ふ」(9ウ)

箒木〔以歌巻の名とせり〕

〔そのはらやふせ屋におふるは、き、のありとは見えてあはぬ君かな平貞文〕

〔源十六才きりつほと此巻の間三年あり其内に藤つほに密通ありたりと思ふへし〕

源は藤つほに御心さしあれば内にのみさふらひよう<sup>51</sup>

し給ておほいとのにはたえくまかて給ふ〔あふひの上の事也〕

48 蔵人所は禁中仙洞執柄大臣家にもあり殿上の次の間に布障子ヲ隔テ地下ノ者の候スル所也

49 二条の悪大臣殿ノ御むすめ弘徽殿のいもうと也

50 そのらはふせ屋は信濃国の名所也森の最上に箒に似たる木あると見て其下にゆ

けは茂りたる森にて見えぬ心に此歌よめり一切衆生は悉あると見えて空なること

はり也

51 さふらひよく也

な<sup>52</sup>か雨はれまなき頃<sup>53</sup>うちの御物いみさしつゝきて

いと、なかるさふらひ給ふ〔あふひの兄〕<sup>54</sup> 頭中将は中にしたしく  
あそひをもたはふれをも心やすくふるまひたり

此中将も右のおと<sup>55</sup>、のすみかは物うく里にても我

かたのしつらひまはゆくして源ともろ共にかく

もんをもあそひをもおさ<sup>56</sup>くたちをくれす心の〔10オ〕

うちにおもふ事かくしあへすむつれ聞え給ふつれ

く<sup>57</sup>と降くらししてしめやかなるよゐの雨におほとなふら

近くて文共<sup>58</sup>給ふちかきみつしなるいろく<sup>59</sup>の紙なる文

とも引出て中将ゆかしかれはさりぬ<sup>60</sup>へきすこしは見

せんかたわなるへきもこそとゆるし給はねはやん<sup>61</sup>ことなく

せちにかくし給ふへきなとはかやうのおほ<sup>62</sup>そうなるみ

つしなとにちらし給ふへくもあらずこれは二のま<sup>63</sup>ちの

心やすきなるへしとてかたはしつゝ見るに心あて

にそれかかれかととふ中にいひあつるもありもて

はなれたるもおかしとおほせとことすくなにて

とかくまきはし給ふ〔10ウ〕

〔挿絵〕 〔11オ〕

52 三日以上ヲ霖といふ也

53 物忌悪夢又は怪ある時物忌ト書て門にたつる也

54 頭中将は蔵人少将の事也左大臣殿の子也

55 しつらひ料理

56 おさく治定

57 おほとなふら灯台也

58 いろく<sup>59</sup>の紙なる文は艶書也

59 せちに大切也

60 おほそう大惣外さまの体也

61 二のまち次ノ心也

そなたにこそおほくつとへ給ふらめすこし見はやさて

なん此つしも心よくひらくへきとの給へは御らんし所

あらんこそかたく侍らめなと聞え給ふつるてに女の

しなをさため給へり〔頭中将詞 初段〕<sup>62</sup> おやなとたちそひもて

あかめ<sup>63</sup>まとの内なる程はかたかとを聞つたへて心をうこ

かす事<sup>64</sup>もあめりはかなきすさひをも人まねに

ひとつゆへ<sup>65</sup>つけてしいつる事をくれたるかたをはいひかく

しさて有ぬへきかたをはつくるひていふにそれしか

あらしとをしはかりてはいか、思ひくたさんまことかと

見もてゆくに見をとりせぬやうはなくなんあるへきと

うめき給へは源もおほしあはする事やあらんほゝゑみて〔11ウ〕<sup>66</sup>

〔二段〕そのかたかともなき人はあらんやとの給ふ〔頭中 三段〕<sup>67</sup> とる

かたなきとすくれたるとはかすひとしくこそ侍らめしな

たかく生れぬれは人にかしつかれてかくるゝ事

しねんに其けはひこよなかるへし中のしなになん

をのかし、のたてたるおもむきもみえてわかるへき事<sup>68</sup>

かたくおほかるへし〔源詞 四段〕<sup>69</sup> もとのしなたかく生れな

から身はしつみくらゐみしかくて人気なきと又

62 是より品定也

63 まとの内楊家有女初長成養在深閨人未識

64 ゆへつけ由付何にても一芸也

65 うめき歎く心也

66 上智は悪人にそへともあしくならず下愚は聖人にあへともうつらぬ也

67 〈女三三アタル〉

68 自恣をのかさまく也

69 〈明石入道の類なるへし〉

なを人の上達部までのほりたるか家の内をかさり  
 人にをとらしと思へる其けちめをはいかゝわくへき  
 左の馬のかみ藤式部丞御物いみにこもらんとて  
 参れり此しなくをさためあらそふ〔馬詞〕<sup>71</sup> なを人の「（12オ）  
 なりのほりたるはよの人の思ひなし猶ことなり又<sup>72</sup>  
 もとはやんことなきすぢなれとおとろへぬれは心は  
 心としてことたらすわろひたる事とも出づるわさ  
 なめれは<sup>73</sup> 中のしなにそをくへきすりやうの品さた  
 まりたる中にもまたきさみくありてえり出<sup>74</sup>  
 つへきころほひなりもとのねさしいやしからぬか  
 やすらかに身をもてなし家の内にたらぬ事な  
 かめるまゝにはふかすまはゆきまでもてかしつける<sup>75</sup>  
 むすめなどのおとしめかたきおひいづるもあるへし  
 みやつかへに出たちて<sup>76</sup> 思ひかけぬさいはひとりいづるも  
 おほかりかしなといへは〔源詞二段〕すへて<sup>77</sup> きはしきによる「（12ウ）  
 へきなんやとてわらひ給ふ〔馬詞三段〕もとのしな時代の<sup>78</sup>  
 おほえ打あひたるはをくれたる事はさらにいはず又  
 すくれたらんもさるへき事とおほえて心もおとろく

70 此二人誰ともなし  
 71 なを人直人  
 72 諸大夫などの従三位に成たるなるへし  
 73 〔軒端の萩にあたる〕  
 74 根本の種性  
 75 不省略  
 76 〔桐壺更衣にあたる〕  
 77 〔女三にあたる〕  
 78 〔藤つばにあたる〕

ましかみかかみはなにかしらかをよふへき程ならず  
 といふ〔源詞〕<sup>79</sup> 世にありと人にしられす「へ」むくらのかどに<sup>80</sup>  
 おもひのほかにはうたけならん人のとちられたらん  
 こそめつらしくはおほえめ〔四段〕父のとしおひ<sup>81</sup> せうとの  
 かほにくけにおもひやりことなる事なきねやの  
 内にいといたく思ひあかりはかなくしてゐたることわ  
 さもゆへなからす見えたらんかたかどにてもいかゝお  
 もひのほかにおかしからさんいてやかみのしなとお<sup>82</sup>  
 もふにたにかたけなる世をと<sup>83</sup> 君はおほすしろき御  
 そとものなよゝかなるになをしはかりをしとけなく  
 きなし給てそひふし給へる御ほかけいとめてたく  
 女にて見たてまつらまほし〔馬詞五段〕大かたの世につ<sup>84</sup>  
 けて見るにはとかなきも我ものとうちたのむへき  
 をえらはんにえなんおもひさたむましかりける「（13ウ）  
 （挿絵）「（14オ）  
 おのこのおほやけにつかうまつるにもまことのうつは<sup>85</sup>  
 ものとなるへきはかたかるへしかしこしとてもひとり  
 ふたり世中をまつりこちしるへきならねは<sup>86</sup> 上は下  
 にたすけられ下は上になひきて事ひろきにゆ

79 〔夕顔にあたる〕  
 80 〔へ〕むしたにもあまた声せぬ浅茅生にひとりすむらん人をしそおもふうつほの  
 姫君の歌也  
 81 〔藤式部カ妹ノ事也〕  
 82 〔葵の上などのしわさのすくれたる事もなきゆへ也〕  
 83 二義あり  
 84 器量の人にて世中を一人にては成かたしと也  
 85 上ハ含淳徳以通其下下ハ懷忠臣以事其上



つろふらんせはき家のあるしとすへき人ひとり  
 をおもひめくらすにたえはてあしかるへき大事  
 ともなにかた／＼おほかる人はたゝしなにもよろし  
 かたちをはさらにいはいすいとくちおしくねぢけ<sup>86</sup>  
 かましきおほえたになくはたゝひとへに物まめ  
 やかにしつかなる心のおもむきならんよるへをそつ  
 るのたのみ所には思ひをくへかりけるまたわらはに<sup>87</sup>「(14ウ)  
 侍し時女はうなどの物かたりよみしを聞いていと哀  
 かなしく心ふかき事かなと涙をさへおとし侍し  
 いま思ふにはいとかる／＼しき事也心さしふからんお  
 とこをゝきてめのまへにつらき事ありとも人の心  
 を見しらぬやうににけかくれて人をまとはし心を  
 見んとする程になかき世の物おもひになるいとあち  
 きなき事也心ふかしやなとほめたてられてあはれ  
 すゝみぬれはやかてあまになるおとききゝつけて<sup>87</sup>  
 なみたおとせはつかふ人ふるこたちなときて おとこ  
 の御心はあはれなる物をあたら御身をなといふに  
 くやしき事もおほかるに仏も心きたなしと見」(15オ)  
 給ひつへし心はうつろふかたありとも見ぞめし心  
 さしいとおしく思はゝさるかたのよすかにおもひても<sup>88</sup>  
 有ぬへきにさるやうならんたちろきに絶ぬへき<sup>89</sup>  
 わさ也すへてよろつの事なたらかにゑんすへき<sup>90</sup>

86 倭人ねちけ人とはうらおもてある人を云也  
 87 后之言後言在二夫之後故以レ女謂二後達二  
 88 永き別れと成行也  
 89 紫ノ上ノ類なるへし

事はほのめかしうらむへきふしをもにくからすかす  
 めなさはそれにつけてあはれもまさりぬへし我心<sup>91</sup>  
 も見る人からおさまりもすへしおとこの心は つな  
 かぬ舟のうきたるためしもけにあやなしさは侍らぬ  
 かといへは中将うなつく馬のかみ物さためのはかせ<sup>92</sup>  
 に成てひゝらきゐたり「馬詞八段」木のみちのたくみの  
 よろつの物をつくり出すもりんしのもてあそひ物」(15ウ)  
 のさたまらぬはそはつきされはみたるもいまめ  
 かしきにめうつりておかしきもあり大事としてま  
 ことにうるはしきでうとのかさりとするやうある<sup>93</sup>  
 物をなんなくしいつる事まことの物の上手は  
 さまことに見えわかれ侍る又ゑ所にも見をよはぬ  
 ほうらいの山いかれるいのすかたから国のはけし  
 きたものゝかたちおにのかほなとのおとろ／＼しく  
 作りたる物はしちには似さらめとさて有ぬへし<sup>94</sup>  
 よのつねの山のたゝすまひ水のなかれ人の家<sup>95</sup>  
 るけにと見え心しらひをきてなとを上手はいき<sup>96</sup>  
 ほひことにわる物はをよはぬ所おほかめる手をか  
 きたるにもふかき事はなくてこゝかしこのてん  
 」（16オ）

90 怨（ゑん）する也心の内にうらむる也  
 91 泛乎若（はん）不（ふ）繫舟（けい）おとこの心はつなかなさる舟のことくなるを女のすこしの  
 92 しつとにてはなれゆく事もあると也  
 93 ひゝらき鷺鳥のはねをひろたることくも也  
 94 美麗  
 95 調度  
 96 心つかひ也  
 97 掟

なかにはしりかきそこはかとなくけしきはめる  
は打見るに <sup>97</sup>かとくしくけしきたれとま  
ことのすちにとりならへてみれば猶しちになん  
よりける <sup>98</sup>はかなき事たにかくこそ侍れまして  
人の心の時にあたりてけしきはめらん見るめの  
なさけをはえたのむましく思給へて侍る其始  
の事すきくしくとも申侍らんとてちかくゐよ  
れは君もめさまし中将もいみしくしんして <sup>99</sup>つら  
つえをつきてむかひる給へり」(16ウ)

〔挿絵〕(17オ)

〔馬物語 九段〕 <sup>100</sup>はやうまた下らうに侍し時あはれと思ふ  
人侍りきかたちなとまほにも侍らざりしかは  
とまりにとも思侍らすとかくまきれ侍しをも  
えんしいたくし侍しかは心つきなくかゝらて <sup>101</sup>おい  
らかならましかはとうるさくおもひながら数な  
らぬ身をなとかくしも思ふらんとしねんに心  
おさめらるゝやうに侍し此女とかくにつけてもの  
まめやかにうしろみ心にたかふ事なくもかなと

97 〈へ〉相坂の関の岩かとふみならし山たち出るきりはらの駒

唐太宗ノ時柳公権心正 則筆正 心不正則不筆

御堂殿ノ時行成ノ書ヲ唐に渡さるゝ唐人讀テ曰日本ノ左大臣は王義之再来ト云

98 かくはかなき木ノ道絵手跡

99 支願

100 昔也

101 大やう おとなしき心ならば也又真実ならば也

なひき見にくきかたちを見やうとまれんと

つくりろひ見なるゝまゝに心も <sup>102</sup>けしうはあらすたゝ

此にくきかたひとつなん心おさめす侍しいかてこる」(17ウ)

はかりのわさしておとして此かたもすこしよろしく成

さかなさもやめんと思ひてなさけなくつれなきさま

をみするにえおさめぬすちに <sup>105</sup>てをよひひとつを

ひきよせてくひて侍しをおとろくしく <sup>106</sup>かこちてかゝる

きすさへつきぬれは世をそむきぬへかめりなとおと

してけふこそはかきりなれとをよひをかゝめて

<sup>107</sup>手をおりてあひ見し事をかそふれは

これひとつやは君かうきふし

〔女〕 <sup>108</sup>うきふしをこゝろひとつにかそへきて

こや君かてをわかるへきおり

<sup>109</sup>りんしの祭のてうかくに夜ふけて雪打はらひこよ」(18オ)

る日ころのうらみはとけなんと思給へしに女はう共

はかりゐて <sup>110</sup>さうしみはおやの家にわたりぬるとこた

102 不下習あしくは非ず也

103 にくきかたひとつは物えんし

104 悪(不祥也)

105 小指

106 うらみて也

107 ゆひくひたるひとつはかりにてはなしうき事あまたあると也

108 こなたにもうきふしをかそへたると也

109 十一月西日大裏北ノ陣にて有

110 正身(その身はいふ心也)

へ侍り<sup>111</sup> 〈へ〉立田姫<sup>112</sup> 〈へ〉たなはたの手にもをとるましくく

して侍しいと哀に思ひたりと申すへさて同し頃

まかりかよひし所あり心はせまことにゆへありと見

えぬへく歌よみはしりかきかいひくつまをと

手つき<sup>113</sup> 口つきたとく<sup>114</sup> しからす見るめ<sup>115</sup> 事もなく侍

しかはゆひくひの女うせて後<sup>116</sup> しはく<sup>117</sup> なるまゝに

まはゆくえんにこのましき事はめにつかぬ所ある

に打たのむへくはみえすかれく<sup>118</sup> に見するに又

しのひて心かよはす人そありけらし神な月の頃<sup>119</sup> 」（18ウ）

月おもしろき夜内より<sup>118</sup> まかて侍るにある<sup>119</sup> うへ人

此車にあひのりてこの人いふやうこよひ人待

らん心くるしとて此女の家のあれたるくつれより

池の水月たにやとるすみかをとておりて入ぬ<sup>120</sup>

もとより心かはせるにやらうの<sup>120</sup> すのこたつ物

111 物を染る事

〈へ〉見ることに秋にもあるか立田姫紅葉そむとや山のてるらん

112 物をたちぬふ事

〈へ〉あふ事はたなはたつめにひとしくてたちぬふさはあへすそ有ける

113 手つき 琴ひく事物かく事

114 口つき 歌うたふ事歌よむ事

115 無事 ほめたる心也

116 しけく也

117 まはゆく 打とけぬいやな心也

118 退出 〈マカテ〉

119 殿上人

120 板敷 えん也

にしりかけて笛とり出てふきならす内より<sup>121</sup>

わこんをかきあはせたりおとこ菊をおりて

ことのねもきくもえならぬやとなから

つれなき人をひきやとめける

いま一こゑき、はやすへき人のある時に手なのこし<sup>122</sup>

給ふそとあされかくれは女声つくるひて<sup>123</sup> 」（19オ）

こからしにふきあはすめるふえのねを

ひきと、むへきことのはそなき

すきたはめらん女に心をかせ給へあやまち

して見ん人のためかたくなゝる名をもたて

つへきものなりといましむ<sup>124</sup> 」（19ウ）

〔挿絵〕 」（20オ）

〔頭申將〕 なにかしは<sup>124</sup> しれものゝ物語せんとして忍びて見そ

めたりし人おやもなく心ほそけにて打たのめる

けしきもらうたけ也<sup>125</sup> かくのとききにをたしくて

まからざりしに四の君よりうたてある事をいは

せけるさりともしらて久しくせうそこもせず<sup>125</sup>

おさなきものゝありしに思ひわつらひてなてしこ

の花をおこせたり<sup>126</sup> 」（此女夕かほの上也）

山かつのかきほあるともおりく<sup>126</sup> に

121 十二絃ノ琴也

122 き、はやすへき人 馬のかみをさして殿上人ノ云也

123 うはの空なる事なれは何として引と、めんそと也

124 白痴

125 油継して也

あはれはかけよなてしこの露

〔頭中〕さきましる花はいつれとわかねとも

なをとこなつにしくものそなき」(20ウ)

〔夕〕打はらふ袖に露けきとこなつに

あらしふきそふ秋もきにけり

〔此おさなき人玉かつら也〕心やすくて又とたえをき侍しにあとも

なくこそうせにしかまた世にあらははかなき世

にそさすらふらんいかて此なてしこをたつねんと

おもひなからえこそき、つけ侍らねとかたり給ふ

藤式部また文章のせうに侍し時あるはかせの

もとにかくもんなとし侍とてかよひし程にあるし

のむすめにいひよりて侍しをおやき、つけて盃

もて出てふたつの道うたふをきけとなん聞え

しかと打とけてもまからす其むすめを師と」(21オ)

してこしおれ文作る事なとならひ侍しかは

今にそのおんはわすれ侍らねとさいしと打たの

まんに無才の人なまわらならんふるまひを見

えんにはつかしく久しくまからて物のたよりに

立より侍れはつねのかたには侍らてもこのしに

あひて侍しをふすふるにやと思ふに此さかし人

126 四君の方よりおとさるゝを風吹そふとよめり

127 流離

128 文章生儒者ノ初学也

129 富家女易嫁嫁早軽其夫 貧家女難嫁嫁晩孝於姑

130 こしおれ歌のことし

世のたうりをおもひとりてうらみさりけり

月ころ ふひやうをもきにたへかねてこくねち

のさうやくをふくしてくさきによりたいめん給

はらぬ此香うせん時に立より給へといふ式部

〔へ〕さゝかにのふるまひしるき夕くれに」(21ウ)

ひるますくせといふかあやなさ

あふ事の夜をしへたてぬ中ならは

ひるまもなにかまはゆからまし

君たちそらことゝてわらひ給ふからうしてけふ

は日のけしきなをれりかくのみこもりさふらひ

給ふもおほと、御心いとおしければまかて給ふ

内よりおほと、御かたへは長神ふたかりたれは

いつかたにかたゝかへし給はんとあるに紀のかみか

家中川のわたり此頃水せきいれてすゝしき

かけときこゆきのかみにおほせ事給へはいよの

かみ家に、しむ事侍て女房なんうつれる」(22オ)

131 そひにくからんと思ふ也

132 腹痛

133 蒜〔ヒル也〕

134 〔へ〕我せこかくへきよる也さゝかにのくものふるまひかねてしるしも

135 蒜に昼ヲもたせて也

136 へたてゝたえゝなる中なれは恥ると也

137 天一神也

138 紀のかみは伊与介か子也

139 西は桂川東は鴨川なれは中川と云也

140 伊与介留守ト云心につゝしむ事と云り



- 141 渡殿  
 142 此姫君の事前かたにはなしこ、にて書出す也式部卿宮は桃園ノ也  
 143 客人  
 144 次ノ問也  
 145 湯殿也  
 146 少々 細許

頃にてせはき所に侍れはいか、と申すその人近なる  
 所こそうれしかるへけれど俄におはしたり水の心  
 はへおかしく柴垣<sup>141</sup>として虫の声蜚しけしわた  
 とのより出たるいつみにのそみて人々酒のむこの西  
 おもてに女の声聞ゆるを立き、給へは<sup>142</sup>式部卿宮の  
 姫君へ源よりあさかは奉り給し歌などの事を  
 いふあるしの子共あまたある中に十二三はかり  
 なるあり是はいよのすけか女はうの弟なるかち、  
 なく成て後此あねにかゝりてゐたる也殿上なども  
 思ひかけなからえましらひ侍らすと申す此子に  
 あねの事とひき、給ふ人くは皆ゑひふしぬ」(22ウ)  
 (挿絵) 「(23オ)  
 源はとけてもねられす北のさうしのあなたに  
 あねの声して此子に<sup>143</sup>まらうとはね給ひぬるか、ふ也  
 女<sup>の</sup>詞  
 中将の君はいづくにそ人氣とをしといへは<sup>144</sup>なけし  
 のしもに人々ふしていらへすゆ<sup>145</sup>に入てた、今参らん  
 といふも聞ゆ源はしやうしのかけかねをこゝろみに  
 引あげ給へはあなたよりはさゝさりけり火はほの  
 くらきにみたれかはしき<sup>146</sup>からひつたつ物の中を  
 わけ入給へはいとさゝやかにてふしたりうへなるきぬ

- 147 曹司 房也  
 148 中将の君きくゆへにつれなきとよみ給へり鳥の心あり  
 149 鳥の音に泣そへたる心也

をしやるまで女は中将の君かと思へり人しれぬお  
 もひをかけてとの給ふにおとろきたるをかきい  
 たきてさうし<sup>147</sup>のもとに出給ふに中将<sup>女</sup>の君きてこは  
 あさましと見奉りなみくの人ならばこそひきも  
 かなく<sup>148</sup>らめあまたの人のしらんはいか、と心さはく  
 におく<sup>149</sup>なるおましにいたきて入給ぬ鳥もなき人々  
 もおきさはけは中将の君参りてかくと申す源  
 つれなきをうらみもはてぬしのゝめに  
 とりあへぬまでおとろかすらん  
 女は此ありさまいよのすけか夢にやみゆらんと空  
 をそろしくて  
 身のうさをなけくにあかてあくる夜は  
 とりかさねてそねもなかれぬる  
 月は有明なるに西おもてのかうしより人々のそ」(24オ)  
 く源はかへりみかちにて出給ふ左大臣殿へかへり  
 給てもま<sup>と</sup>ろまれ給はす彼<sup>空</sup>人の思ふらん心の中  
 おもひやり給へりきのかみ参たるに彼小君はえ  
 させてんやとの給てめしよせなつかしくかたらひ給ふ  
 わらへ<sup>心</sup>にうれしと思ふあねの事もよくいひ  
 きかせて御文を此子につかはし給ふ  
 見しゆめをあふ夜ありやとなけくまに  
 めさへあはてそころもへにける

又の日小君をめせはあねに御返事いとこふかゝる  
御文みるへき人もなしと申せといふいかゝさやう  
には申さんといへと返しはなしきのかみも此まゝ母を  
おもひかけてついせうし此子をもかしつきけりきのふ  
の返事はなきかたとひ給ふにしかゝと申すいよの  
すけよりも我はさきにあひみし中也と此子に  
いつはりて御文はつねにありされと打とけたる御  
いらへもなし又物いみの頃彼家におはしたり女  
君にはひるよりかくとの給ふに有し夜の夢を  
又やくはへんとおもひみたれ待奉らんもまはゆ  
くなやましきにこしを打たゝかせんとて中將  
といひしものゝつほねにうつろひぬ源は人ごとく  
しつめて御せうそこあれと小君え尋ねあはす  
からうしてもとめきたりいかにかひなしとなく  
はかりいへはおさなきものゝかゝる事はいはぬ物ぞ  
といひおとし心ちなやましくてあたり人にを  
はなさすをさへさせてとなん申せといひはなち  
て心のうちにはいかに程しらぬやうにおほすらん  
と思ひみたる源は小君を待ふし給へるにかくと  
申せはめつらかなる心の程を身もはつかしくうし  
とおほして

はゝきゝのこゝろをしらてそのはらの  
みちにあやなくまとひぬるかな  
女もさすかまどろまれさりけり

かすならぬふせ屋におふる名のうさに「(25ウ)  
あるにもあらずきゆるはゝきゝ、  
小君はねふたくもあらてまとひありくを人々

あやしとみるらんとわひ給ふ其かくれゐたる所  
につれていけとのたまへは人あまた侍れはいか  
てかと申す「(26オ)

空蟬 〔并源十六才以歌ノ名也〕

源はねられ給はす小君も涙をこほしてふしたり  
夜ふかく出給ふ其後御せうそこもたえてなしかく  
てもえやむましければさりぬへきおりをみて  
たいめんすへくたはかれとの給ふおさなこゝろにいか  
ならんおりにかとまちゐたるにきのかみ国に  
くたり女とちのとやかなる夕やみのたどくしけ  
なるに我車にゐてたてまつる人見ぬかたより引  
いれておろし奉りひかしの妻戸にたゝせ奉りて  
我は南のかうしたゝきて入ぬひるよりきのかみか  
いもうとのにしの御かたわたらせ給ひて碁をうた  
せ給ふといふ源はすたれのはさまに入て西さま  
に見とをし給へはもやの中はしらにそはめる  
人や心かくるとめとゝめ給へはこきあやのひとへ  
かさね何にかあらんうへにきてかしらつきほそ  
やかにちいさしいまひとりひかしむきにて残る

150 中川の宿にての事也  
151 さそひ奉る也 誘  
152 母屋は本の居所常に机丁ヲかくる是を寝殿作と云也中に一間く柱あり庇あり  
又其次ヲ孫庇ト云也 たつみの方より西を見とをし給ふにそはめるは空蟬也

ところなくみゆしろきうすもの、ひとへかさね<sup>153</sup>  
 ふたあひの<sup>154</sup>こうちき<sup>155</sup>くれなゐのこしひきゆへる  
 きはまてみえたりつふく<sup>156</sup>とこえてまみ口つき  
 あひきやうつきはなやか也替うちはて、<sup>157</sup>けち  
 さすわたりそこはちにこそあらめ此わたりのこうを  
 こそなといへといて此たひはまけにけりをよひをか、  
 めて十は<sup>158</sup>たみ<sup>159</sup>そよそなとかそふるさまいよのゆの  
 ゆけたもたとく<sup>160</sup>しかるましう見ゆ<sup>161</sup>」(27才)

(挿絵) 「(27ウ)

小君源のおはせし所へきて<sup>162</sup>れいならぬ人侍て  
 ちかうもえより侍らすといふ御<sup>163</sup>かうしはさしてし  
 つまりぬさらは入てたはかれとの給ふあねの心  
 たはむ所なくまめたちたれはいひあはせん  
 かたなくていかにしていれ奉らんと思ふ也(源詞)  
 いもうともこなたにあるか我に見せよとのたまふ  
 いかてかさは侍らんかうしに几丁そへて侍ときこゆ  
 人みなねて火かけほのかなるにいれ奉るいかに  
 そとつ、ましけれとみちひくま、に帳のかたひら  
 ひきあけて入給へと人はみなしつまりたり女は几

153 二あひは紫也

154 小樹うへにきる物也

155 紅のこし引ゆへるははかま也

156 けち 闕又詰ため也

157 へいよのゆのゆけたの数は左八右は九中は十六すへて卅三也

158 客人

帳のすきかけ御けはひしるければあさましくて<sup>164</sup>」(28才)

す、しのひとへをきてすへり出にけり源はた、  
 ひとりふしたるを心やすくより給へるにありし  
 けはひよりもものくしければあやしくやうか<sup>165</sup>  
 はりてあさましく心やましけれと人たかへと見え  
 むも<sup>166</sup>おこ<sup>167</sup>かまし女もめさめてあきれたるけしき  
 なり我ともしらせしとおほせと後にかゝる事そ  
 とおもひめくらさんも彼つらき人のためとおほし  
 てたひくのかた、かへに事つけ給しなといひなし  
 給ふこのむすめなま心なくわかやかなるけはひも  
 あはれにてなさけくしく契りをかせ給て彼  
 ぬきすへしたるうす衣<sup>168</sup>をとりて出給ぬ小君を<sup>169</sup>」(28ウ)  
 おこして戸をあけさせたるに老たる女のごゑにて  
 たそと、ふ小君まろそといらふ月くまなくさし  
 出て人かけみえければ又おはする人はたそと  
 とふ民部のおもとなりとつねに<sup>170</sup>た<sup>171</sup>けたちのたかく  
 てわらはる、人あるをいふ也からうして小君と車  
 に乗給て二条院におはしぬ(二条院は源の御母の御跡也)  
 しはしうちやすみ給へとねられ給はす<sup>172</sup>源

うつせみの身をかへてける木のもとに

なを人<sup>173</sup>からのなつかしきかな

とかき給ふを小君ふところに入てもたり彼

むすめいかにおもふらんといいしけれと御こと<sup>174</sup>」(29才)

159 やうたいかはりて也

160 嗚呼 おかしき心也

つけもなしうつせみの君もあさからぬ御けしき  
をありしなからのわか身ならはとしのひかたければ  
うつせみのはにをく露のこかくれて  
しのひくぬる、袖かな

〔是は伊勢か家の集の歌也〕  
「(29ウ)」

【第二冊】

夕かほ  
わかむらさき  
すゑつむ花  
もみちの賀  
花のえん  
あふひ「(1オ)  
(白紙)」(1ウ)

夕顔 〔以歌詞卷の名也〕

161 同しき年の夏六条の御休所へしのひてか  
162 よひ給ふ中やとりに源のめのと惟光が母いた  
くわつらひてあまに成たるをとふらはんとて五  
条なる家におはしたり此家のかたはらにひがき

161 空蟬の巻は五月此巻は六月也  
162 六条の御休所の事始て云出せり

をしてはしとみ四五けんあげわたしすだれし  
ろうすしけなるにおかしきひたいつきのすき  
かけ見えてのぞくいかなるもの、つどへるにかあらん  
とさしのそき 164 夕かほの花のしろく咲かゝりたる  
を一ふさおりて参れとのたまへは 165 ずいじん門  
に入ておるやり戸くちに黄なるすゝしの「(2オ)  
ひとへはかまながくきなしたるわらは出きて  
うちまねくしろき扇のいたうこがしたるを  
これにをきてまいらせよえだもなさけなげ  
なめる花をとてたてまつる」(2ウ)

(挿絵) 「(3オ)」

166 これみつは門のかぎををきまどはしてらうがは  
しき大路にたちおはしましてとかしこまり  
申す車ひきいれており給ふこれみつか兄のあ  
ざりむこの三河守むすめなとつどひたる程に  
かくおはしましたる事をよろこひかしこまる  
あま君もおきあかりよろこひてなく 167 へへさらぬ  
わかれのなくもかなとこまやかにかたらひ給ふ子  
とも皆打しほたれけりすほうなどの事のため  
ひをきて出給ふとてこれみつにしそくめして

163 半部  
164 夕顔は五位以上ノ人の家には不植ト云ならはせり  
165 隨身 聖徳太子甲斐の黒駒に秦ノ川勝一人付て空をかけり給しにしたかふ故の名  
166 也是始也大臣大将へは上から被下也  
167 みたれかはしき也



ありつるあふぎ御覧すれば

<sup>168</sup>心あてにそれかとぞみるしらつゆの」(3ウ)

ひかりそへたるゆふかほの花

これみつに此西なる家はなに人のすむぞとと

ひ給へは五六日こゝに侍れと病者の事をおもひ

あつかひてとなりの事は聞侍らすと申す此わたり

の事しれらんものをめしてとへとの給へは此やど

もりのおのこをよびてとふ揚名介なりける人の

家になん侍るおとこはみなかにまかりてわかき女

なんありと申すれの此かたにはをもらぬ御心

にて御たゝうかみにあらぬさまにかきかへ給ひて

<sup>169</sup>よりてこそそれかとも見めたそかれに

ほのく見つる花のゆふかほ」(4オ)

ありつる御ずいじんしてつかはす御さきの松

ほのかにて忍ひて出給ふはしとみはおろして

ひまくより見ゆる火のひかり螢よりほのかなり

それより御休所におはしまして日さし出る程

に彼しとみの前わたり給ふ其後惟光参て

彼小家の人はたれともしれ侍らす時々中垣の

かいま見し侍るにわかき女どものすきかげ見え

侍る中にかほよき人侍ると申すへ彼うつせみの

まゝむすめをあはれとおぼさぬにしもあらねどう

つせみの聞ゐたらん事もはつかしければ先うつ

168 源氏の君と思ひやりて折ふしの情に出したる扇也

169 たそかれ時なればよりてこそ源氏と思ふらめなれすしてはしらしと也

せみのこゝろ見はてゝとおほす程にいよのすけ」(4ウ)

のぼりて源へまいり国の物かたりなど申すむす

めをは少将にあづけてうつせみをつれてひたちへ

くたりぬへしと聞給ふに今一度はえあるましき

事にやと小君にかたらひ給ふ秋にも成ぬへ御休所

は物をあまりなるまておぼししめたる御心ざまにて

よはひの程もにげなく人のもりきかんもつら

くてよがれのねさめくおほししほるゝ事さま

く也(源は十六才みやす所廿四才也)霧ふかきあしたねふたげ

なるけしきに打なげき出給ふを御休所の女

はうしゆ中将のおもと御ともに参るしをん色の

うすものを引ゆひたるこしつきたをやかになま」(5オ)

めきたるを源見かへり給てすみのまのかうらんに

しばしひきすへ給へり源

<sup>171</sup>さく花にうつるてふ名はつゝめとも

おらてすきうきけさのあさかほ

手をとらへ給へはいとなれて 中将

<sup>172</sup>朝きりのはれまもまたぬけしきにて

花にこゝろをとめぬとぞ見る

とおほやけ事にいひなす也」(5ウ)

(挿絵)」(6オ)

<sup>173</sup>彼はしとみのあたり車のをとすればわかきもの

170 しをん おもて紫うらすはう

171 朝かほを中将に比して

172 御休所に心をもとゝめ給はて霧の晴をさへまたす出給ふと也

とものぞくに主人とおほしきものはひわたるわらはへの  
いそきて右近の君まづ物見給へ頭中將殿こそこれ  
よりわたり給ぬれといへはいそきくるものはきぬ  
のすそを物に引かけてよろほひたうれたり中將

殿の隨身は<sup>173</sup>なにかしくれかしといふなりといふにそ  
さては雨夜の物語にあはれにわすれさりし人に

やとおほしよる惟光にたばからせてたれともしれ  
す彼ずいじん一人わらは一人はかり御供にて惟光  
か馬を奉りておはしたり夕かほの上あやしう心

えぬ心ちのみして御つかひに人をそへ御ありか見」(6ウ)

せんと尋れどそこはかとなくまどはせりむかし  
ありけん<sup>174</sup>へんげめきてうたて思ひなげかるれと

源の御けはひは手さぐりにもしるきわざなれはた  
れはかりにかあらんとやうたがひたる物思ひをなん

しける源も忍ひかたくるしきまておほえ給へは  
猶たれとなくて二条院にむかへてんとおほして

いざ心やすき所にてのとかに聞えんとかたらひ

給へは猶あやしくをそろしくこそとわかびていへはげ

173 なにくれと云詞也その人此人也

174 三輪の神の小蛇と成給へる事也日本紀の心はおほものぬしの神の妻也その神ひ  
るは見えずして夜来るやまと、姫のみこと夫に語ていはく君つねにひるは見えず  
あきらかにかほを見る事なしねかはくは暫と、まれいましかかたちをみると答て  
いはく君かくしけのなかにおらんおとろく事なかれやまと、ひの命心の中にあや  
しむ夜明てくしけをひらきて見るはしき小蛇ありおほんしたひもの如シ驚  
てさけふ時大神はちてたちまちに人のかたちに成て其妻に語ていはく汝われには  
ち見すいましにはち見せんといひて大空をふみてみもろ山にのほりぬ

にとほ、ゑまれいつれか狐ならんとなつかしけにの  
給へは女もいみしうなびきてさもありぬへう思ひたり  
彼頭中將のとなつうたかはしけれどあな<sup>175</sup>かちにも」(7オ)

とひ給はす八月十五夜くまなき月影いたやの  
ひまもりくるも見ならひ給はぬさまなるに曉ちかく成  
てとなりの家々あやしきしつのおのめさまし哀

いとさむしやことしこそ<sup>175</sup>なりはひもたのむ所すくな  
くゐなかのかよひも思ひかけねはいと心ほそけれ北殿

聞給ふやなといひかはすも聞ゆこほくとなるかみよりも  
おとろく<sup>177</sup>しうふみならずからうすのをとも枕がみに

おほゆ<sup>177</sup>きぬたの音もかすかにこなたかなた空とふ雁の  
声とりあつめて忍ひかたき事おほかり虫のこゑ

みたりかはしくかべの中のきりくすもさまかへておほさ  
る白きあはせうす色の<sup>178</sup>なよらかなるをかさねて花やか」(7ウ)

ならぬすかたいと<sup>179</sup>らうたけ也い<sup>180</sup>さた、此わたり近き  
所に心やすくてあかさんとの給へはいかてか俄ならんとお

いらかにいひゐたり右近をめして隨身をめさせ御車  
引入させ明かたちかう成にけり鳥のこゑ聞えて

175 稔農<sup>175</sup> 農業田作る事也

176 枕上

177 確

178 和<sup>178</sup>（やはらか也）

179 蒔良<sup>179</sup> 勞<sup>179</sup>

180 真実也 誠也

181 みたけさつじにやあらんおきなびたる声にてぬかづくそ  
（精選）  
 きこゆるなむたうらいとうしとおかむなるかれき、  
（兼ノ詞）  
 給へ此世とのみは思はさりけりとあはれかり給て

183 うばそくかおこなふみちをしるへにて

184 こん世もふかききりたかふな

〔夕かほの上〕 185 さきの世のちきりしらるゝ身のうさに

ゆくすゑかねてたのみかたさよ 186 」（8オ）

（挿絵） 187 」（8ウ）

十五日の月 いさよふ程にかららかに打のせ給へは右近  
 そのりける其わたりちかき 186 なにかしの院におはして  
 あつかりめし出るあれたる門のしのふ草霧もふかく露  
 けきに御袖もいたうぬれにけり 源

187 いにしへもかくやは人のまとひけん

188 我またしらぬしのゝめのみち

〔夕〕 188 山のはのこゝろもしらてゆく月は

うはのそらにて影やたえなん

181 御嵩 金峰山也吉野蔵王権現ハ弥勒出世ノ時地ニ敷ヘき金ヲ守給ふト也 過去尺

182 迦 現在観音 当来弥勒 三会ノ導師也

額拝 礼拝也

183 四部ノ御弟子 比丘 比丘尼 優婆塞 一夷

184 現在のうきにて三世を知たると也

185 月出さまにやすらふ心也

186 河原院敷六条坊門万里小路

187 いにしへも如此深切のおもひはと也

188 山の端は月をかくす所なるをしらてゆく月のと也源ヲ山の端によそへて也

いといたくあれて人めもなく木だちうとましよう草  
 木は見所なくみな 189 へへ秋の野らにて池もみくさに  
 うづもれけうとげに成にける所かなさり共鬼 」（9オ）  
 なども我を見ゆるしてんとのたまふ

190 夕露にひもとく花は玉ほこの

たよりに見えしえにこそありけれ

露のひかりやいかにとの給へはしりめに 191 見おこせて

ひかりありと見し夕かほのうはつゆは

たそかれ時のそらめなりけり

192 つきせすへたて給へるつらさよ名のりし給へいと

むくつけしとの給へど打とけぬさまにてくらし

給ふ惟光たつねて御くだ物なと参らすたとしへな

くしつかなるゆふへの空をなかめ給ておくのかたは

くらく物むつかしと女は思ひたれははしのすたれを 」（9ウ）

あげてそひふし給へりかうしとくおろしておほとな

ふら参らせてすこし打とけゆくけしき也源は

193 禁中 内にいかにもとめさせ給はんとおほし六条わたりにも

いかに思ひみたれうらみられんいとをしきすぢは

まづ思ひ聞え給ふよひ過る程にすこしねいりた

まへるに御枕かみにおかしけなる女あてをのがいとめ

189 へへ里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまかきも秋の野らなる

190 扇の縁にて如此也ト

191 たそかれ時にてしかくと見る事なかりしとおほめきて答也今はたくひなしと

也

192 蠢（ムクメリムクシ）

てたしと見奉るをは尋給はてかくことなき人  
 を時めかし給ふこそつられとて此夕かほの上を  
 かきおこさんとすと見給ふ物をそはるゝ心ちして  
 おとろき給へは火もきえにけり太刀を引ぬきて  
 右近をおこし給ふにこれもをそろしと思ひたるさま」(10オ)  
 にて参よりとのみ人おこしてじそくさして  
 参れといへとの給へと右近い来てまからんくらうて  
 といへは打わらひ給て手をたゝき給へは山びこの声<sup>193</sup>  
 うとまし此女君いみしくわなゝきまとひていかさ  
 まにせんと思へりあせもしとゝに成て<sup>194</sup>「へ」我がのけしき也  
 こゝにちかくとて右近を引よせ給て西のつま戸に  
 出給へはわたとのゝ火も消にけり此院のあつかりの子<sup>195</sup>  
 うへわらは一人隨身はかりそ有けるしそくさして  
 参れずいしんもつるうちして絶すこはつくれとの給ふ  
 惟光は御むかへに参るへきよし申てまかで待ぬると<sup>196</sup>  
 聞ゆかう申ものはたき口也ければゆづる打ならして」(10ウ)  
 火あやうしといふかへり入てさぐり給へは女君はさな<sup>197</sup>  
 からふして右近はかたはらにうつぶしゝたりそよ  
 などかうはとてかいさぐり給へはいきもせずなよゝ  
 として我にもあらぬさま也しそくめしよせて見

193 山彦 天彦 こたまの類也  
 194 夢たにも何とも見えすみゆれ共我かもまとふことのしけさに  
 195 渡殿 廊下也  
 196 地下ノ番衆兵具ヲ帶ス  
 197 誰何火行<sup>（ヘイカウ）</sup>

給へは枕かみに夢に見えつる女おもかけ見えてふと  
 きえうせぬやゝとおどろかし給へとひえ入ていき  
 はとく絶にけりあが君いき出給へととの給へとひえ入<sup>198</sup>  
 にたればけはひうとく成ゆく右近はむつかしとお  
 もひける心ち皆さめてなきまとふさまいといみし  
 此院もりの子をめして惟光にいそき参へきよし  
 いへと仰る兄のあざりもそこに物する程ならは」(11オ)  
 くへきよしへ尼君のきかんにおとろゝしくいふな  
 との給ふ夜中も過にけんかし風あらく松のひゝき<sup>199</sup>  
 こふかく鳥の からこゑになきたるもふくろふはこれ  
 にやとおほゆ右近は物もおほえす君にそひ奉て  
 わなゝきしぬへし又これもいかならんと心空にて<sup>200</sup>  
 とらへ給ふ火はほのかにまたゝきて物のあしをと  
 ひしゝとふみならしうしろよりくる心ちす惟光  
 をはこゝかしこたつねける程に曉かたに参れり爰  
 にあやしき事のあるかゝるとみの事にはずきやうなと<sup>201</sup>  
 をこそすなれ願なともたてさせんあざり物せよとい  
 ひやりつるとの給ふあざりはきのふ山にのほりにけり  
 いづれもわかきとちにていはんかたなけれと此院」(11ウ)

198 我君  
 199 からひたる声也（ヘ）鼻鳴（キ）松桂枝（シ）狐蔵（ル）蘭菊叢（シ）  
 200 灯のひらめくは人の目たゝきに似たり  
 201 急也俄也



守などにきかせん事は<sup>202</sup> びんなかるへしまつ此院を出

おはしましねといふさてこれより人すくなゝる所はいか  
てかあらんと給ふに<sup>（惟光近）</sup>昔見給へし女の尼にて侍る

東山のへんにうつし奉らんと明はなるゝ程のま

されに御車よすうはむしろにをしくゝみてこれ

みつのせ奉るかみのこほれ出たるもめくれまとひて

あさましうかなし源は御馬にて二条院におはし

ませ人さは<sup>（心）</sup>かしくならぬ程にとて右近をそへて

車をは出しつ源は物もおほえ給はすな<sup>（源心中）</sup>どてのり

そひていかざりつらんいきかへりたらん時つらくや<sup>（12オ）</sup>

思はんと心まとひのうちにもおほす日たかなれと

おきあかり給はす内より御使あり大殿の君達も

参給へと頭中将はかりこなたにいり給へとみすの内

なからのたまふ<sup>203</sup>めのと五月の頃よりをもくわつらひ

しをとふらひ侍しに其家のしも人俄になく成

にけるををぢはゝかりて日暮てとり出侍るを聞

つけ侍しかは神事の頃とかしこまりてえ参らぬ也

此あかつきより我もしは<sup>204</sup>ぶきやみにやかしらいたく

てくるしとの給ふ中将さらはさるよしをそうし

侍らんまことしからすといひ給へるにむね<sup>源</sup>つづれ給へ

り頭中将の弟蔵人の弁をしてまめやかにそうせ<sup>（12ウ）</sup>

させ給ひ大殿へもかゝる事ありてえ参らぬよし

202 便なき也

203 源ノ偽をの給ふ也

204 咳病

聞え給ふ日暮て惟光参れり今はかざりにこそ

ものし給ふめれといふ右近はとゝひ給ふ我も<sup>（惟光右近か事ヲ）</sup>をくれ

じとまよひ侍しを先しばし思ひしづめよとこし

らへをき侍つると聞ゆ今一たひ<sup>（源言）</sup>なきからをたに

みん馬にて物せんとの給ふさらは夜もふけぬさ

きにかへらせ給へとて惟光と隨身をぐして出

給ふ十七日の月さし出ておはしつきぬ法師ばら

二三人<sup>205</sup>声たてぬ念仏する清水のかたはひかり

おほくて人のけはひしげし此あまの子<sup>206</sup>大とこ

声たうとく経よみたり右近は屏風へたてゝふし<sup>（13オ）</sup>

ぬ女君のかたちをそろしげもおほえすらうたけ

にいさゝかかはりたる所なし手をとらへて我に今一

たひ声をたにきかせ給へいかなるむかしの契り

にかとこゑもおしますなき給ふ右近も同じ煙

にとしたひしをとかくすかして二条院へといさ

め給ふ明かたにはやかへらせ給へと聞ゆむねつと

ふたかりて御馬にもはかしく乗給ふへき御さ

まならねは又これみつそひたすけておはしますさ

る堤の程にて馬よりすべりおりて御心ちまど

ひければ惟光川の水にて手をあらひ清水の

くはんをんをねんじ奉る<sup>（13ウ）</sup>

（挿絵）<sup>（14オ）</sup>

君も御心をおこして仏をねんし二条院へ帰り

205 喪家仏事<sup>（心）</sup>次第葬送以前二ハ無言ノ念仏

206 大徳

給ふ彼右近はつほねなとちかく給て二条院にさふらは  
 是源詞いかなる人そ七日くゝの仏か、せてもたがためとか  
 思はんとたまへとみつから忍右近心ひ過し給し事を  
 なき跡にさがなくやはとて父は三位中将となん  
 聞えしがはやううせ給ひにき頭中将まだ少将  
 にもし給し時見そめ給て三とせはかりかよひ  
 給ひしを207こぞの秋右大臣殿よりをそろしき  
 事の聞えたりしに物をぢし給て西の京に御  
 めのとのすみける所にはひかくれ給へりしが見くるし  
 きにすみわひてあやしき所にもし給しを「(14ウ)  
 見あらはされ奉る事とかたるにされはよとおほし  
 ていよく哀さまさりぬおさなき人まとはしたり  
 と中将のうれへしはさる人にやと、ひ給ふしかお  
 と、しの春ものし給へりし女にてらうたけになん  
 と聞ゆ其子はいづくにそ我にえさせよかたみ  
 に見んとの給ふ西右詞の京にておひ出給はんははか  
 くしくあつかふ人なしときこゆ「夕かほの上は十九才也」  
 〔源〕見し人のけふりを雲となかむれは  
 ゆふへのそらもむつまじきかな  
 源わつらひ給ふをうつせみ聞て今はおほしわ  
 する、やとこゝろみに「(15オ)  
209とはぬをもなとかと、はてほどふるに  
 雨夜の物語にありし也  
 人ノ果ハ煙煙ハ雲ト成也  
 は、かりてえとひ奉らぬをなとかおとろかさせ給はぬと也

いかはかりかはおもひみたる、  
 源もめつらしきにあはれわすられ給はす  
210うつせみの世はうき物としりにしを  
 又ことのはにかゝるいのちよ  
 まゝ、むすめのかたへ小君して  
 ほのかにも軒端のおぎをむすはすは  
 露のかことをなに、かけまし  
 〔返し〕211ほのめかす風につけても下おきの  
 なかば、霜にむすほ、れつ、  
 夕かほの上の四十九日ひえの法花堂にて忍て  
 ず経なとせさせ給ふ惟光か兄のあざりたうと  
 き人にて212になうしけりふせにつかはさる、  
 はかまをとりよせて源  
 なくくもけふはわがゆふ下ひもを  
 いつれの世にかとけて見るへき  
 彼夕顔の宿に残りたる人々いつかたにと思ひ  
 まへとえ尋ね聞えす源ももらさじと忍  
 給へは右近もわか君玉かつらの事をもえきかす  
 へいよのすけ神な月のついたち頃ひたちへ下る  
 女はうもくたらんにとてくし扇213「へへ」ぬさなど  
 又とはれて其詞に命かけたと也  
 ほのとはれて思ひ絶し心の又むすほゝと也  
 無二  
 錢別送物也 祓麻 羈中にテは道祖神に手向るゆへに旅人に送る也  
 〔へ〕此たひはぬさもととりあへす手向山紅葉の錦神のまにく

彼こうちきもつかはさる」(16オ)

214 〈へ〉あふまてのかたみはかりと見し程に

ひたすら袖のくちにけるかな

〔うつせみ〕<sup>215</sup> せみのはもたちかへてけるなつ衣

かへすを見てもねはななれけり

けふそ冬たつ日もしるく打しくれ空の

けしきあはれ也なかくらし給て源

216 過にしもけふわかるゝも二みちに

ゆくかたしらぬ秋のくれかな」(16ウ)

若紫 〔以歌名也〕

源十七才の春<sup>217</sup> わらはやみにわつらひ給て北山に

おこなひ人のあるに御供四五人はかりしてあかつき

おはしたり三月つこもりなれば山の桜はまだ盛也

さるへき物<sup>符也</sup>つくりてすかせ奉りかちなと参る程に

日たかくさしあかりぬすこし立出見給へは爰かしこ

219 僧房ともつゝらおりのしにも小柴<sup>（薪）</sup>うるはしう

220 屋らうをつゝけてあか奉り花おりなとするはなに

214 〈へ〉あふまてのかたみとてこそと、めけれなみたにうかふもくつなりけり

215 十月一日に更衣あり一年に二度也

216 過にしは夕かほわかるゝは空蟬

217 瘴瘴<sup>（マツリ）</sup>

218 のまする也

219 盤折九折清少納言枕草子とをくて近き物くらまのつゝらおり

220 屋廊

かし僧都の二とせこもれる所といへりこゝにおかし

けなる女こともわかき人わらはへなん見ゆるといふ日

たつるまゝに源はうしろの山<sup>（シリヘン）</sup>に出て京のかたを見」(17オ)

給ふにかすみたる四方のこす糸絵に似たるなどの

たまへは御供の人々いこくの海山のさまふじの山

なにかしのだけなとかたり申すはりまのあかしの

さきのかみ<sup>221</sup> しほちのむすめかしつくなど義清申出

すへ夕暮のかすみたるに惟光はかり御供にて彼小

柴垣のもとに立出のそき給へは西おもてに持仏す

へておこなふあま君四十あまりにてたゝ人と

みえすきよけなるおとな二人わらはへ出入あそふ

中に十はかりにやあらんしろき、ぬ山<sup>222</sup>ふきゝて

はしりきたる女こあたまみえつる子ともになるへ

うもあらずうつくしけ也すゝめの子をいぬきか」(17ウ)

にかしつるふせこにこめつる物をとてかほあかくす

りなしてたてり此子のねびゆかんさまゆかしき

人かなとめをとめ給ふに藤つほによく似たりと

おほす此姫君の事をあま君

226 おひたらんありかもしらぬわか草を

をくらす露そきえんそらなき

221 新発意ハ初テ釈門ニ入人也 初発心ノ義也

222 山吹〔表朽葉裏黄〕

223 犬公

224 なく体也

225 ねひゆく調行

少納言のめのと

<sup>227</sup> はつ草のおひゆくすゑもしらぬまに

いかてか露のきえんとすらん

と聞ゆる程に僧都きたりて源氏の中將此

上のひしりのかたにおはしますと尼君にいへり」(18オ)

(挿絵) 「(18ウ)

此僧都より源へ御弟子をつかはさる源そうつへお

はしまし御物語聞え給ふ本草も心ことに植なし

やり水にかゝり火とうろなと参たりひるの面影

心にかゝりて尋まほしき夢を見給しかなと聞

え給へは僧都打わらひてうちつけなる御夢語

かな故按察大納言世になくなる其北方はなに

かしかいもうとにて世をそむきしが大納言のむす

め一人をもてあつかひしを<sup>228</sup> 兵部卿宮かたらひ給ひ

しかなく成て物おもひにやまひづくなと申給ふ

さては姫君は兵部卿の御むすめなるへしとおほし

くはしくとひ聞給ふまだにげなきほとなれと」(19オ)

おさなき御うしろみすへく聞え給てんや思ふ心

ありてとの給ふいとうれしかるへきおほせ事なり

うば君にかたらひ聞えさんとへり初夜過る

ほとに源あま君のもとにおはして少納言の

めのとにあひ給ひて

226 成長をくらすは尼君のはやくきえん事也姫君を思召す故也

227 紫を残して何とてきえんとの給ふそと也

228 兵部卿宮 薄雲女院 源氏宮 (翻刻者注「三人が兄弟であることを示す朱の線あり」)

はつ草のわか葉のうへを見つるより

旅ねの袖も露そかはかぬ

いりてあま君にきこゆあま君<sup>229</sup>

まくらゆふこよひはかりの露けさを

み山のこけにくらべさらん

ゆくすゑの事まで契り給ふ暁かたにせんほうの」(19ウ)

こゑ山下風につきて滝の音にひゝきあひたり

〔源〕<sup>230</sup> 吹まよふみやまおろしにゆめさめて

なみたもよほすたきのをとかな

〔僧都〕<sup>231</sup> さしくみに袖ぬらしける山水に

すめるこゝろはさはぎやはする

あけゆくまゝに山の鳥ともそこはかとなくさへ

つり鹿のたゝすみありくもめつらしく見給ふ

御むかへの人々まいりておこたり給へるよろこひ

きこえ内よりも御使あり源

宮人にゆきてかたらん山さくら

風よりさきにきてもみるへく」(20オ)

〔僧都〕<sup>232</sup> うどんげの花まちえたる心ちして

みやまさくらにめこそうつらね

〔聖〕 おく山の松のとほそをまれにあけて

一夜の枕さへ露けきに深山の苔の袖に思ひくらへ給へよと也苔は尼君の袖也若

草は不似合事なれば取あひ給はぬ也

229 山寺の体也

230 源はさしよりにさへぬらし給ふ歟我は耳なれて心さはかぬと也

231 我はみ山桜に目もうつらぬ也

232

また見ぬ花のかほをみるかな

御まもりに独鉈たてまつる僧都のもとなる童  
してあま君にせうそこあり源

夕まくれほのかに花のいろを見て

けさはかすみのたちそわつらふ

〔尼君〕 まこと<sup>233</sup>にや花のあたりはたちうきと

かすむるそらのけしきをも見ん

御むかへの人々君達もあまた参り給へり岩が」(20ウ)

くれのこけのうへになみゐてかはらけま

いる頭中将笛をとり出てふきすましたり

弁の君<sup>234</sup> 〈へ〉とよらの寺のにしなるやとうたふ僧都

きんをもて参りてこれた、御てひとつあそ

はして山の鳥もおとろかし給へと聞え給へは

源かきならしてみなたち給ひぬ」(21オ)

〔挿絵〕」(21ウ)

まつ内へ参給て日ころの御物語聖のたうと

かりける事なと聞え給ひ左大臣殿とつれてま

かで給ふ又の日北山へ御文奉れ給へり

おもかけは身をもはなれす山さくら

こゝろのかきりとめてこしかと

〔尼君〕 あらし<sup>235</sup>ふくおのへのさくらちらぬまを

こゝろとめけるほとのはかなさ

233 花に立休らひ給ふ事まことならはとまり給はんを見んと也

234 催馬楽 葛城〈へ〉かつらきの寺のまへなるやとよらの寺のにしなるや

235 桜の上はかりをよめり

二三日ありて惟光を奉れ給ふ

あさか山あさくも人をおもはぬに

なと山の井の<sup>236</sup> かけはなるらん

237 〈へ〉くみそめてくやしとき、し山の井の」(22オ)

あさきながらやかかけをみるへき

あま君わつらひ給ふ事よろしくは此頃過して

京の殿にわたり給てなん聞えさすへきとあるを

心もとなうおほすへ三四月の頃より藤壺なやみ

給ふ事ありて三条の宮にまかて給ふ〔懷妊也〕

源の密通の中立は王命婦也 源

238 見ても又あふ夜まれなる夢のうちに

やかてまきるゝわか身ともかな

239 世かたりに人やつたへんたくひなく

うき身をさめぬ夢になしても

源の御なをしなとぬきをき給へるを王命婦かき」(22ウ)

あつめてもてきたり藤つほ七月に内へ参給ふ

すこしふくらかに成給ておもやせ給へるにるもの

なくめてたしへ尼君の京のすみか尋て時く御

せうそこありいたうよりはり給ふと聞給てとふら

ひおはします紫の上も源氏の君こそおはしたな

236 かけはなる影にかりて也

237 〈へ〉くやしくそくみそめてけるあさければ袖のみぬるゝ山の井の水

238 逢見ても無実也夢中に消うせたきと也

239 夢になして我身はなく成ても名は残らんと也



れとのたまふを人々かたはらいたしと思ふまにて

〔源〕いはけなき<sup>240</sup> たつの一こゑき、しより

あしまになつむ舟そえならぬ

〔又〕<sup>241</sup> 〈へ〉手につみていつしかもみんむらさきの

ねにかよひける野へのわか草

僧都の御もとへも久しくをとつれ給はねは人をつ」(23オ)

かはさる九月廿日の程に尼君むなしく成給ふ

と御返事に聞ゆ京の御すみかには姫君と少納言

こもりゐたるを源とふらひ給て

〈へ〉あしわかのうらにみるめはかたくとも<sup>242</sup>

こはたちなからかへるなみかは

〔少納言〕<sup>243</sup> よる波の心もしらてわかのうらに

玉もなびかんほとそうきたる

姫君は源の御ひぎを枕にて何心なくふし給へり

<sup>244</sup> 四十九日過て父宮姫君の御むかへに参らんと也

あさからぬ心さしは父宮よりも源はまさらん物を

とてかいなでつ、かへりみがちにて出給ぬ道の」(23ウ)

ほとにしのひくかよひ給ふ所あれば門た、かせ給

240 たつは紫の上の事也

241 いつか我ものにせんと也藤つほのゆかりの心也

〈へ〉紫の一もとゆへにむさしの、草はみなからあはれとそ見る

242 紫をあしわかによりめり 定家卿源氏一部の名所に入らる、也 新勅撰あしわか

うらにきよするしら波のしらしな君を我おもふとは

243 源ヲ波にして玉もは紫也

244 うは君の七々日也

へと聞付る人なし御供の人<sup>245</sup>にうたはせ給ふ

朝ほらけ霧たつそらのまよひにも

〈へ〉ゆきすきかたきいもか門かな

内よりつかひを出して 誰ともなし<sup>246</sup>

たちとまり霧のまかきの すぎうくは

草のとざしにさはりしもせじ

二条の殿へかへり給ぬ姫君は父のもとにむかへ給

はんと聞えければ源惟光を御供にて夜ふかく

わたり給ひみなねたりけるをおとろかし姫君を

もいだしおこして宮の御使に参りきつるそいそ」(24オ)

きいざ給へとて御車にのせ給ふ少納言も夢のこ、

ちしていかにとやすらひなからよろしききぬき

かへてのりぬ二条院におはしつきてもさすがこゑ

たて、もえなき給はす少納言かもとにねんと給ふ

日たかうおき給へはわらはへ四人めしにつかはして

姫君に参らせらる藤つほのめいなれは源

<sup>247</sup> ねはみねとあはれと思ふむさし野の

露わけわふる草のゆかりを

〔姫君〕<sup>248</sup> 〈へ〉かこつへきゆへをしらねはおほつかな

いかなる草のゆかりなるらん」(24ウ)

245 猿丸大夫集にあひしれる女の家のまへをわたるとて草をむすひて入たりける

〈へ〉妹か門引過かねて草むすふ風ふきとくなあはん日までに

246 過うくはとひ給へと也

ねは寝也藤つほのゆかりと思ふと也

248 紫の上はゆかりとあるもかこたれんもしり給はぬ也 実方集に〈へ〉かこつへき

ゆへもなき身にむさしの、わかむらさきを何にかくらん

## 末摘花

〔源十七才二月より次の年の春までの事也若紫よりさきの事也夕顔の巻の次と見るへし以詞名也〕

夕かほの上の事おほしわすれたゆふの命婦といふは

色このめるわかうどにてめしつかひ給ふ故常陸の

みこの御むすめ心ほそくて残りる給へるを物のつ

いてに源にかたり聞えければあはれと聞給てこの

命婦にあんないさせいさよひの月おかしき程にお

はしたり命婦入て御ことのねいかにとてめしよす

れは姫君かきならし給ふおなしくはけぢかくてき

かせよとの給へと心くるしけに物し給ふをうしろめ

たきさまにやと聞ゆ源は<sup>249</sup>すい<sup>249</sup>がい<sup>249</sup>のかくれのかたに」(25才)

たちより給ふにもとよりたててのおとこあり誰ならん

とおほせは頭中将源の内より出て大殿にも二条院

にもおほせぬをいづちならんと跡につきておほ

したり源のぬきあしにあゆみのき給ふにふと

よりて頭中将

もろともに大内山はいてつれと

いるかた見せぬ<sup>250</sup>いさよひの月

〔源〕里わかぬかけをはみれとゆく月の

いるさの山をたれかたつぬる

ひとつ車にのりて大殿にかへり給ふ八月廿日

249 透垣

250 やすらふ月也

251 諸人月をは見る物なれとも入在所は見ざる物と也

あまりの月のおかしきに命婦にかたらひあはせて」(25ウ)

おはす姫君命婦にすかされてたいめんし給ふ

〔源〕いくそたひ君か<sup>252</sup>じ、まにまけぬらん

ものないひそといはぬたのみに

姫君の御めのとこ侍従とてはやりかなるわか人さしよりて

かねつきてとぢめん事はさすかにて

こたへまうきそかつはあやなき

〔源〕へへ<sup>254</sup>いはぬをもいふにまさるとしりながら

をしこめたるはくるしかりけり

姫君はた、我にもあらすはつかしけなれはいまは

か、るそ哀におほしける夜ふかう二条院へ帰給ふ

頭中将きてこよなき御あさいかなといへはおき」(26才)

あかり給ふ朱雀院行幸楽人舞人さためらる

へきよしつたへ申さんとてまかて侍とて同じ車

にて内に参給ふ夕つかたひたちのみこの姫君

に御文つかはし給ふ

夕霧のはる、<sup>255</sup>けしきもまた見ぬに

<sup>256</sup>いふせさそふるよひの雨かな

252 無言也

253 童ノ無言を行せんと約束して無言々と云テ何にてもかねをつくとして打ならし

て後物いはぬ事也八講などの論義の時鐘義者かねといへは威儀師磬を打鳴ス其後

論義ヲやむる也物不云事也

254 へへ<sup>254</sup>心には下ゆく水のわかかへりいはて思ふそいふにまされる

255 けしきは女君にたとへたる也

256 いふせさ物かなしき也又をそろしき也

御返しえし給はねは侍従そ例のをしへ聞ゆる

はれぬよの月まつほとをおもひやれ

おなしこゝろに <sup>257</sup>なかめせずとも

試楽のほと過てそ時くおはしける打とけたるよ  
ゐの程入給てかうしのはさまより見給へは <sup>258</sup>立のきて

四五人物くふもありみなさむげにふるきもの

きてふるふもありかたはらいたければ <sup>259</sup>立のきて

たゝいまおはするやうにて打たゝき入給ふ雪か

きたれふり風あれて火もきえにけりからうし

て火ともしつ此姫君はゐだけのたかうをぜな

かに御はなは <sup>259</sup>ふげんぼさちののり物とおほゆいろ

雪はつかしくしろうてひたいつきはれたるに猶

しもかちにてはなのさき色つきたりかみはうち

きのすそにたまりてひかれたる程一尺はかり

うつくしけにめてたし <sup>260</sup>ゆるし色のうはしらみたる一

かさねくろき <sup>261</sup>うちきうはぎには <sup>262</sup>ふるきの <sup>263</sup>かは <sup>263</sup>「(27オ)

ぎぬいときよらにかうばしきをき給へりいたう

はぢらひて口おほひし打ゑみ給ふけしきは

257 なか雨をもたせり

258 後達〔女房也〕

259 普賢菩薩乗〔三〕大白象〔三〕鼻如〔三〕紅蓮華色〔二〕

260 紅ノ浅きを云也紅葉ハ深キヲ禁色ト名付タヤスク着用セス

261 樹〔キノノ上ニ着也〕

262 貂〔テン〕

263 裘

したなう <sup>264</sup>すゝろびたりいかて打とけぬ御心さまそとて

朝日さす軒のたるひは <sup>265</sup>とけなから

なとかつらゝのむすほゝるらん

との給へとたゝむゝと打わらひて口をもげなるも  
いとおしかゝる人をわれならぬ人は見忍ひてんや

と哀におほさる松の雪のみあたゝかけに降つめる

山里めきて橘の木のうつもれたる御隨身して

はらはせ給ふうらやみかほに松の木のをのれとお

きかへりさとこぼるゝもおかしとおほして出給ぬ <sup>266</sup>「(27ウ)

〔挿絵〕 <sup>267</sup>「(28オ)

御車出へき門はあげざりければかぎのあつかり尋

出たれはおきなのいみしきがむすめにやさむしと

思へるけしきにてあやしき物に火をほのかに入

て袖ぐゝみにもたりおきなが戸をえあけやら

ねはよりてひきたすくる <sup>266</sup>源

ふりにけるかしらの雪を <sup>266</sup>みる人も

をとらすぬらすあさの袖かな

きぬあやわたなとおひ人共彼おきなのためまで

おほしやりて奉り給ふ年も暮ぬ命婦参り

て姫君の御文たてまつる

<sup>267</sup>「(28ウ) からこころも君か心のつられければ」

264 おかしけ也

265 とけたるやうにてむすほゝれたると也

266 見る源もおきなにをとらす袖ヲぬらすと也

267 「(28ウ) いか我涙はつきんから衣君か心のつらきかきりは

たもとはかくそそほちつゝのみ

あさましのくちつきやとおほして此文のはし  
にてならひに源

268 〈へ〉なつかしきいろともなしになに、この

すゑつむ花を袖にふれけん

〔命婦〕<sup>269</sup> くれなゐのひとはなころもうすくとも

<sup>270</sup> ひたすらくたすなをしたてすは

又の日源より

<sup>271</sup> あはぬ夜をへたつる中のころもてに

かさねていと、見もしみよとや

七日の節会はて、末つむへおはしたりれいの」(29オ)

さまよりけはひよづき給へりへむらさきの上の

かたへおはしてひいなあそひゑなとかきて

いろどりかみのなかき女をかきてはなにべに

をつけて見給ふ姫君もわらひ給へり

くれなゐの<sup>272</sup> 花そあやなくうとまるゝ、

梅のたちえはなつかしけれと」(29ウ)

268 〈へ〉よそにのみ見てやはこひん紅の末つむ花の色にいてすは

269 命婦は女君の方人に成てよめる也

270 永(ヒタスラ)

271 心のへたてを重るうへに猶かさねよといふ心歟我もみんなも見よとや

272 鼻を思ひ出て也

<sup>273</sup> 紅葉賀 (源十七才十八才)

<sup>274</sup> 朱雀院の行幸は神無月十日あまり試楽を

せさせ給ふ源氏の君と頭中將<sup>275</sup> 青海波まひ給ふ

に人みな涙おとしけりみかと藤つほにけふの青

海波のおもしろきをいか、見給ひつやと聞え

給ふ次の日源より藤つほへ

<sup>276</sup> 物おもふにたちまふへくもあらぬ身の

袖うちふりしこゝろしりきや

から人の袖ふる事はとをけれど

たちにつけてあはれとは見き」(30オ)

(挿絵) (30ウ)

行幸には春宮みこたち世にのこる人なし

がくの舟こまもろこしとかざり紅葉の陰に

<sup>277</sup> 四十人の かいしろ物の音吹たてたり青海波の

か、やき出たるにかざしのもみちいたうちり

273 紅葉賀トつゝきたる詞はなし

賀ノ始ハ淳和天皇天長二年十一月奉<sup>①</sup>賀<sup>②</sup>太上天皇五八ノ御齡<sup>③</sup>此賀誰ノ為ト

モ見エス四十賀トハ見エタリ今十年ノ齡ヲ奉<sup>④</sup>祝心也山海珍味ヲ以テ酒宴音楽終

日ト云々興福寺ナトニテ御祈モアリ五十賀ハ五十寺五十ノ具何ニテモ用意ス

274 院ノ御賀也朱雀院ハ三条朱雀ニアリ朱雀冷泉いづれもおりゐのみかとのおはし

ます院也

275 青海波は唐の楽也清和ノ御時より始ル楽也

276 けふの楽はた、御前に見せ奉らせ給ふへき為ト有しかはなき手をつくし、心さ

277 しをはしらせおはしましつらんと云心也  
垣代 地下堂上相交

て菊をおりてさしかへ給ふ承香殿の御はらの四のみこまだわらはにて秋風楽まひ給ふ其夜源氏正三位し給ふ頭中將正下のかゝるし給へり藤つほは懷妊ゆへ参らせ給はす源は藤つほのすみ給ふ三条の宮へおはしたるにむらさきの上の父兵部卿宮も参り給ひて御物かたりなと聞え給ふ源をむこになとはおほしよらていとめてたき御さまかなと見たてまつり給ふ年あけて源は<sup>278</sup>朝拝に参り給ふとて紫のうへをさしのそきけ<sup>源詞</sup>ふよりはおとなしくなり給へりとて打ゑみ給ふひいなをしすへて三尺のみつし又ちいさき屋ともあつめてあそひ給へり」(31ウ)

(挿絵) ー (32オ)

内より大殿へ参給へは葵の上れいのよそくしき御けしき也ことしよりすこしよつきて見え給は、うれしからんとおほすへ藤壺は正月もたちて二月十日あまりにおとこみこみ給ふ「冷泉院是也」みかとは此若宮をゆかしくおほしたりあさましきまで源によくに給へは人の思ひとがめんとむつかしげなるもことほり也源もいまた見給はて命婦に<sup>279</sup>いかさまにむかしむすへるちきりにてこの世にかゝる中のへたてそ

278 清涼殿の東の庭に四位五位に至る迄袖ヲ連テ舞踏スル也  
279 子ゆへ又へたてある中と也

〔命婦〕<sup>280</sup> 見てもおもふ見ぬはたいかになけくらんこやよの人のまとふてふやみ」(32ウ)此若宮のうつくしかりけるを源見給てせんざいのとこなつさき出たるをおりて命婦のかたへ

よそへつゝみるに心はなくさまで露けさまさるなてしこのはな

藤つほにこれを見せ奉りければ

袖ぬるゝ露のゆかりとおもふにも

なをうとまれぬやまとなてしこ<sup>281</sup>

むらさきの上を源のかしつき給ふを大とのには誰をかさのみもてかしつき給ふらんとあやしくおほさる内にもきこしめして葵の上をいとおしとおほしけりへ源内侍のすけとて年五十七八なるか<sup>282</sup>いみしうあだめいたるありなどさしもさだ過る迄みたるらんとおほしてたはふれ事いひて心見給ふにうへの御けつりくしにさふらひはてゝこのましげに見ゆるをさすかに過しかたくてものすそをひきおとろかし給へは扇をかさして見かへりたりわかもたまへるあふきにさしかへて見給へは歌あり<sup>283</sup>

〔へ〕君しこはたなれのこまにかりかはん

280 藤壺は御子ヲ見ても歎給へり源は見ぬとなけき給ふと也  
281 畢也  
282 央 (サタ半也)  
283 (へ) 我門の一村薄刈かはん君か手なれの駒もこぬかな



さかりすきたるしたはなりとも

〔源〕<sup>284</sup>〈へ〉さ、わけは人やとかめんいつとなく

こまなつくめるもりのこかくれ」(33ウ)

(挿絵) 「(34オ)

うへはみさうじよりのそかせ給てわらはせ給ふ頭中将  
此事を聞て我も此すけのこのみ心を見まほしう  
おほしたりうんめいでんのわたりを源た、すみありき  
給へは内侍びはを引ゐたりあつまやをうたひて  
より給へれば 内侍

<sup>286</sup>たちぬる、人しもあらしあつまやに

<sup>287</sup>うたてもかゝるあまそ、きかな

<sup>288</sup>源我ひとりしもき、をふましとて

人つまはあなわつらはしあつまやの

<sup>289</sup>まやのあまりもなれしとおもふ

頭中将見あらはさんとてすこしまとろむにやと」(34ウ)

みゆるに<sup>290</sup>やをら入くるに源は此人ともしり給はす

屏風のうしろにかくれ給ぬ頭中将屏風をこほく

とた、みよせておとろくしくさはかし太刀を

<sup>284</sup>〈へ〉篠わけは荒こそまめ草かれの駒なつくめる森の下かも

<sup>285</sup>あまたの人のなつくる内侍なれば人やとかめんと也

<sup>286</sup>上ノ句卑下の心也

<sup>287</sup>転(ウタテウタ)

<sup>288</sup>源一人の恨にテはあらし也

<sup>289</sup>まやは本ノ屋ヲ云也あまりは庇也

<sup>290</sup>しつか也

ひきぬけは内侍あが君くと手をするにうち

わらひぬ源いで此なをしきんとの給へはつととらへ

てゆるし聞えずさらはもろ共にとて頭のおびを

ときてぬがせ給へり 頭中将

つ、むめる名やもりいてんひきかはし

かくほころふる中のころもに

〔源〕<sup>291</sup>かくれなき物としるくなつころも

きたるをうすき心とぞ見る」(35オ)

内侍あさましくておちとまれる御さしぬき帯

なとつとめて奉れり

<sup>292</sup>うらみてもいふかひそなきたちかさね

ひきてかへりしなみのなこりに

〔源〕<sup>293</sup>あらたちし波にこゝろはさはかねと

よせけんいそをいかうらみぬ

此御なをしの袖を頭中将より奉らるれば源

中たえは<sup>294</sup>かことやをふとあやうさに

は<sup>295</sup>なたのおひはとりてたにみす

〔頭中将〕君にかくひきとられぬる帯なれば

かくてたえぬる中とかこたん」(35ウ)

源は宰相に成給ふ藤つほの若宮を春宮に

<sup>291</sup>誰ともしられしとかまへたるをうすき心とよみ給へり

<sup>292</sup>兩人帰給ひしと也

<sup>293</sup>頭をうらみん事なしまへく頭ヲよせたる故と也

<sup>294</sup>内侍ト頭ト中絶はかこたれんと帯を返し給ふ也

<sup>295</sup>はなたは空色也中絶たる心也

とおほせと御うしろみおはせねは弘徽殿の女御  
を引こして藤壺を中宮にたて給ふ入内也  
源も御供にて御こしの内おもひやられて

つきもせぬ心のやみにくるゝかな

雲井に人をみるにつけても」(36オ)

花宴  
〔源十九才〕

きさらき廿日あまり南殿の桜のえんせさせ

給ふ中宮春宮弘徽殿の女御参り給ふみこ達」(36オ)

かんだちめ<sup>297</sup> さんるん給りて文つくり給ふ宰相君

頭中将も句をつくり給へりやうく入日になる

ほと春鶯囀まふに源の紅葉の賀のおりお

ほし出て春宮かざし給はせてせちにせめ給ふ

頭中将も柳花苑まひ給ふ源に中宮御めとまりて

おほかたに花のすかたを見ましかは

露も<sup>298</sup> へへこゝろのをかれましかは

上達部后春宮かへらせ給ひ月いとあかうさし

出たるに源ゑひ心ちに藤つほのわたりしのひう

かゝひこうきてんのほそどのに立より給へは三の

口あきたり女御はうへの御つほねにまうのほり」(36ウ)

296 紫震殿也

297 探韻

298 へへ数ならぬ心を花にをき初て風吹ことに物思ひつく源の姿すくれたるによ

り藤壺の心にかゝれり大かたのにはあらぬと也

299 昇殿参上

給て人すくな也人はみなねたるにいとわかうお

かしけなる声のなべての人とは聞えぬか<sup>300</sup> へへおほろ

月夜にる物そなきとずんしてこなたざまに

くるふと袖をとらへ何かうとましきとて

<sup>301</sup> ふかき夜のあはれをしるもいる月の

おほろけならぬちきりとそおもふ

いだきおろして戸はをしたてつ名のりし給へいか

てかうてやみなんとたまへは女<sup>302</sup>

うき身世にやかてきえなはたつねても

草のはらはとはしとおおもふ」(37オ)

(挿絵) 」（37ウ）

〔源〕 いづれそと露のやとりをわかんまに

こさゝかはらに風もこそふけ

人々おきさはけはわりなくてあふきはかり

をしるしにとりかへて出給ぬその日は<sup>304</sup> 後宴

の事ありてまきれくらし給つ彼しるしの

<sup>305</sup> 扇は桜の三重かさねにてこさかたにかすめる

300 へへ照もせずくもりもはてぬ春の夜のおほろ月夜にしく物そなき

301 かすむ月はゆくゑしりかたしまた入さるに月の名残入やうに思ひなさるゝと也

302 草の原までも尋給ふへき事たるを名のらすは尋給ふましきかと也

303 此人こき殿かたと覚えたり源と右大臣中よからぬ間尋んまにさはかしからんと

陳し給へり

304 御酒かならず又ある也

305 檜扇ノ両方ノ端三枚つゝ、ヲ桜のうすやうにてつゝ、み色々の糸にてとつる也末に

あふひを給ひたる也

月をかきて水にうつしたる也

<sup>306</sup>世にしらぬ心ちこそすれあり明の

月のゆくゑをそらにまかへて」(38オ)

(挿絵) 「(38ウ)

やよひの廿日藤花のえんに桜二木をくれたる  
いとおもしろきに源氏の君おはせねは（金生也）大殿

<sup>307</sup>我やとの花しなへてのいろならは

なにかはさらに君をまたまし

いたう暮る程にまたれてそわたり給ける夜すこ  
しふけゆくに源はゑひなやめるさまにもてなし

まされたち給ぬへしんてんに弘徽殿の女一

女三おはします戸口によりゐ時々うちなけく

かたによりかゝりて几帳こしにおほろの手をとらへて

〔源〕あつさゆみいるさの山にまとふかな

<sup>308</sup>ほのみし月のかけや見ゆると」(39オ)

〔返し〕<sup>309</sup>心いるかたならませはゆみはりの

月なきそらにまよはましやは」(39ウ)

<sup>306</sup>〈へ〉有明の月のゆくゑをなかれてそ野寺の鐘はきくへかりける 慈円此心にて

よめり

<sup>307</sup>大かたならぬと少しをこりたる歌と也但二木計トあるゆへ歟

<sup>308</sup>ほのみしはほそとのゝ事也

<sup>309</sup>まとうかなとあるにあたりてなるへし心いらはまとはしとにや廿日過なれば弓

張なるへし面白キ歌と也

葵 〔源廿一廿二才〕

桐壺のみかとの御世 <sup>310</sup>朱雀院にかはり春宮

の御うしろみは源に聞えつけ給ふへ六条の御休

所は源のうとくしくし給へは姫君齋宮にゐ  
給ふにことつけて伊勢へくたりやしなましと

かねてよりおほしけり <sup>311</sup>御禊の日上達部数さた

まりてかたちあるかきりしたがさねうへのはかま」(39ウ)

馬くらまでみたとゝのへたり源大將も <sup>312</sup>供奉也

一条のおほちより所くゝの御さじき心々にしつく

しいみしき物見也大とのゝ君はなやましけれと（業の上）

あやしき山かつ遠き国よりめこを引くしもう

でくなるをとてにはかに見給ふ日たけ出給へは

ひまもなう車たちわたりたるをさしのけさする

中にあじろのふるくよしばめる車ふたつあり（朝代）

これはさやうにさしのけなとすへきにはあらずと

口こはく手ふれさせす是は齋宮の御母みや

<sup>310</sup> 朱雀院即位

<sup>311</sup> 桃園式部卿宮ノ姫君おりゐ給て後の事也

桐壺ノ女三ノ宮賀茂へ入せ給ふ時の御はらへ也齋院御禊之事先ト定ありて東河に  
テミソキ有てすくに初テ齋院に入給ふ也其年の四月に御社へ参給はんとて祭の前  
に吉日ヲえらひて御禊アリ紫野の野宮に入給ふ是ヲ二度ノはらへト云ト定はうら  
なふ事也伊勢の齋宮ノ野宮は差峨ノありす川にあり大内ノ左衛門のつかさに入給  
ふへきを諸司に入ト云也諸司に入給はん時も東河にテ御禊アリ又野宮ノ時もあれ  
は二度ノ御はらへト云也

<sup>312</sup> 十二人 勅使也

す所のしのひて出給へる也といふあふひの上の人  
くさなひはせそとて御車ともたてつ、け」(40オ)  
つれば人だまひのおくにをしやられて物も  
見えすしち<sup>314</sup>なともみなをしおられて人わ  
ろう何にきつらんとくやしとかへらんとし給へ  
ととをりいてんひまもなしをしけたれたる  
ありさまこよなうおほさる

<sup>315</sup> かけをのみみたらし川のつれなきに

身のうきほとそいと、しらる、

まつりの日は大<sup>美の上</sup>とのには物見給はす大将の君

は彼御車の所あらそひいとおしうおほす」(40ウ)

(挿絵) 「(41オ)

源は二条院におはしてむらさきの上の御

くしつねよりもきよらにみゆるをかきな

でけふはよき日ならんかしとて御ぐしそぎ<sup>316</sup>

給ふ源

はかりなきちいろのそこのみるふさの<sup>317</sup>

おひゆくすゑはわれのみそ見ん

人給車 別に用意して誰に成とも下されんための車也

榻(シチ) シヤウ木ノやうにして上下ノ安からんため也

源ヲ見給へとも源はさなき事をよめり

ひんそきと云也

うつほ十一に云かみのうつくしき事みるを付たるやう也海松は不変なる物なれ

は祝シテ用也

318 源ノ心不定トよめり漸おとなひたる心也

〔紫上〕 ちいろともいかてかしらんさためなく<sup>318</sup>  
みちひるしほののとけからぬに」(41ウ)

(挿絵) 「(42オ)

源はむらさきの上ひとつ車にてまつり見給ふ

上達部の車ともおほき中に女車より扇を

さし出てまねく引よせさせ給ていかなるすき

ものならんとおほさるれば源内侍

<sup>319</sup> はかなしや人のかさせるあふひゆへ

神のゆるしのけふをまちける

〔源〕 かさしけるこゝろそあたにおもほゆる

<sup>320</sup> 〈へ〉 やそうち人になへてあふひを<sup>321</sup>

〔又内侍〕 くやしくもかさしけるかな名のみして

人のためなる草葉はかりを

葵の上はめつらしき事さへそひて御なやみなれば」(42ウ)

源心くるしうおほして二条院にて御すほうおこ

なはせ給ふ物のけいきす玉なといふものおほく<sup>322</sup>

さまくの名のりする中に人にもさらにうつらす

つとそひたるさまにてかた時はなる、おりもなき

ものひとつあり御休所へ源より御文あり日ころ

319 人々はあふとなればけふを待けるははかなしと也

320 八十氏人トは天下ノかさしと成と也

後撰第四賀茂祭日物見侍ける女の車に言入て侍ける〈へ〉行かへる八十氏人の玉  
かつらかけてそ頼むあふひてふ名を返し〈へ〉ゆふたすきかけてもいふなあた人  
のあふひてふ名は御祓にそせし

321 あふひは人たのめなる草の名と也

322 生霊

あふひの御なやみすこしおこたるさまなりつる

心ちの俄にくるしけに侍をえひき<sup>323</sup>よかてなどあり

〔御休所〕袖ぬるゝこひちとかつはしりなから

おりたつたこのみつからそうき<sup>325</sup>

〔源〕あさみにや人はおりたつわかかたは

身もそほつまでふかき恋ちを」(43オ)

物のけおこたらすかちの僧声しづめて法花経よむ

〔霊歌〕なけきわひ空にみたるゝわか玉を

〈へ〉むすひと、めよしたがひのつま<sup>326</sup>

すこし御こゑしつまり給へれは大宮御ゆもてよせ

給へるにかきおこされて生れ給ぬ「是夕霧也」山の

座主なにくれの僧ともしたりがほにあせをしの

こひまかてぬ御休所霊と成給へは御ぞなとも

けしの香にしみかへり<sup>327</sup>御ゆする参りきかへなとし<sup>328</sup>

給へとおなしやうなれは我身なからうとまし

うおほす秋のつかさめしあるへきとて大いとの

君達参り給て殿の内人ずくなゝるに葵」(43ウ)

過〔ヨグル〕

源氏物語第一秀歌也早苗とる時おりたつ物也

贈答第一と也

吉備公誦文〈へ〉玉はみつぬしはたれともしらねともむすひてとむるしたかへ

のつま

芥子ノ香は邪氣祈禱の時護摩にたく事有

沐〔ユスル〕

の上俄にむねせきあけて内に御せうそこ聞

え給ふ程もなくたえ入給ぬ<sup>329</sup>ゆすりみちてい

みしき御心まとひ也二三日見奉り給へとかは

り給ふ事ともあれは鳥辺野にゐて奉る<sup>330</sup>

〔源〕のほりぬる煙はそれとわかねとも

なへて雲井のあはれなるかな

にばめる御ぞ奉るも夢のこゝちして源

かきりあれはうす墨衣あさけれと

なみたそ袖をふちとなしける

菊のけしきばめる枝に文つけてをきていに

けり見給へはみやす所の御手也」(44オ)

人の世をあはれと<sup>331</sup>きくも露けきに

をつるゝ袖をおもひこそやれ

〔源〕とまる身もきえしもおなし露の世に

心をくらんほとそはかなき<sup>332</sup>

御法事なと過ぬれと四十九日までは猶こもり

おはす頭中将

<sup>333</sup>雨となりしくるゝ空のうき雲を

いつれのかたとわきてなかめん

動〔ユスル〕

誘〔イテ〕

菊ヲ聞によせたり

心をくらはとは御休所ノ物のけに成しをほのめかし給ふ也

人の果は煙トなり煙は空ト雲又雨となる也



〔源〕<sup>334</sup> 見し人の雨と成にし雲井さへ

いと、しくれにかきくらす頃

わか<sup>タ</sup>君の御めのと宰相の君して大宮へ源より

草かれのまかきに残るなてしこを

わかれし秋のかたみとそ見る

〔大宮〕<sup>335</sup> いまも見てなか／＼袖をくたすかな

かきほあれにしやまとなてしこ

源よりあさかほの斎院の御かたへ

<sup>336</sup> わきて此くれこそ袖は露け、れ

ものおもふ秋はあまたへぬれと

秋霧にたちをくれぬ<sup>337</sup>とき、しより

しくる、そもいか、とそおもふ

<sup>338</sup> 正日過て源二条院にとまり給ふへしとて人々

まち聞ゆ古き枕ふるきふすま誰と共にかと

<sup>340</sup> なき玉そいと、かなしきねしとこの

あくかれかたきこ、ろならひに

〔又〕君なくてちりつもりぬるとこなつの

露うちはらひいく夜ねぬらん

334 雨と成たるは八月やかて時雨といと、成たると也

かきほあれにしは葵の上の事也

336 あさかほのつれなふある程にと成へし

337 畢也

338 四十九日

339 鴛鴦<sup>ウヰ</sup>瓦冷霜<sup>シテフ</sup>花重<sup>ハナ</sup>翡翠<sup>フエ</sup>衾寒<sup>シメド</sup>誰<sup>ナニ</sup>与<sup>ニ</sup>共<sup>ニ</sup>

340 我心から葵の魂を推量して也

<sup>341</sup> 中宮の御かたに参給て思ひつきせぬ事共を

命婦の君して聞え給ふ二条院にわたり給へは

姫<sup>サ</sup>君いとうつくしく引つくるひておはすひさし

かりつる程におとなひはちらひ給へる御さま也我御

かたにわたり給て中将の君御あしなとまいりて

おほとのもりぬつれ／＼なるまゝに紫の住給ふ

西のたいにて暮うちへんつきなとしつ、日を

くらし給ふおとこ君はとくおき給て女君さらに

おき給はぬあしたあり人々御心ちれいならすおほ

さるゝにやとなけく引むすひたる文御枕もとに

<sup>342</sup> あやなくもへたてけるかな夜をかさね

さすか<sup>343</sup>になれしよるのころをも

其よさりゐのこのもちぬまいらせたり君南の方

に出給て惟光をめして此もちぬかう数／＼に

所せきさまにはあらてあすの暮にまいらせよと

の給ふ<sup>344</sup>ねのこはいくつかつかうまつらすへう侍らんと

申せはみつかひとつにてもあらんかしとのたまふ

少納言<sup>源</sup>かむすめの弁をよひて参らす少納言は

かうしもやはとこそおもひつれあはれにかたしけな

く先打なかれぬ御父式部卿の宮にしらせてんと

341 文字のへんをかくして何の字といひあつる也

342 あちきなくといふ心也

343 十月亥日作餅食也大豆小豆大角豆胡麻栗柿糖七種粉也

344 三日ノ夜ノ餅は白一色也

おほして御もぎの事おほしまうくる<sup>345</sup>へ年かへりて  
ついたちの日は院内春宮に参給ひそれより大殿  
へまかて給へりおとゝあたらしき年とおほさす  
源は若君<sup>346</sup>のおよすけてわらひおはするも哀  
におほす  
<sup>347</sup>あまたとしけふあらためしいるころも  
<sup>347</sup>きてはなみたそふるこゝちする  
〔大宮〕あたらしき年ともいはすふるものは  
ふりぬる人のなみたなりけり<sup>347</sup>」(46ウ)

347 346 345  
源廿二才  
及助  
下ノ句哀なる歌と也

- 1 佐賀大学 文化教育学部 日本・アジア文化講座
- 2 佐賀大学 地域学歴史文化研究センター
- 3 佐賀大学 文化教育学部 日本・アジア文化講座
- 4 佐賀大学 地域学歴史文化研究センター
- 5 福岡教育大学 教育学部
- 6 福岡女子大学 国際文理学部
- 7 東北大学 文学部
- 8 佐賀県立小城高等学校
- 9 九州大学大学院博士後期課程